

もしマーリンが6章でやる
気をそれなりに出したら

カキツバタ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——これは、人間の物語。

一人の女の為に、運命に抗い、旅の果てを求める男達の話。

・ FGO 6章まで、竹箒日記 6章／zero、Garden of Avalon、Fate／stay night本編のネタバレ注意
・ オリ設定・オリ展開

目次

前悔出来たら苦勞はしてない

145

大体マーリンとうっかりのせい | 1

砂漠で遭難したら謎の生物に出会った

13

気がついたら神殿にいた | 24

ファラオとファラオと謎の生物と

37

何事も状況の把握は大切 | 48

料理は良い文明 | 58

理想と願いと現実と | 71

サアケエイツ! | 93

それぞれの道 | 105

この唄を君へ | 123

大体マーリンとうつつかりのせい

——ある少女の話をしよう。

少女は、平穏な日々を過ごしていた。

騎士として働き詰めだが、家に帰ってきて少女の姿を見つけると、きつと強い子になれる、いつも優しく頭を撫でてくれる父。

そんな父を献身的に支え、彼等を育て上げた優しく芯の強い母。

誰よりも口が達者で明るく、しかし誰よりも妹想いの兄。

そんな家族に囲まれながら、街の人々を眺め、しかし賢明な少女はそこに混ざろうとはせず。それでも確かに幸せな日々を送っていた。

……めでたしめでたし。え？流石に短すぎる？

でも、本当にこれくらいなのさ、一人の少女としての彼女は。

正確には彼女はアルトリウスとして育てられた訳だが、それでもまだ彼女は一人の少女でいられた。

彼女はその後……いや、初めから大きな運命を背負わされている。彼女は一人の少女として生きることが出来なくなったのさ。これは人々が決めたことでもあり、彼女自身が決めたことでもある。

——少女は王になった。これは必然であり偶然だ。

そしてその王は今、彷徨い続けた末に最果てまで辿り着こうとしている。

これもまた一つのイフ……とはいえ、僕はこれを見過ごせるほど非情ではないのだ。

彼女が王としてでなく、一人の少女としてようやく一人の青年を愛した。その救われなかった運命を救った光景を視て、久々にハイテンションになっていたところだったのだから。

別の彼女の為に、手も貸したくなるというものさ。

……つと。そろそろ時間かな？

『彼』の手も借りるためには少々早いですが、すぐに動かないといけない。

…うん。そうだな、あちらにも助けを出しておこう。

彼を喚ぶ準備もしとかないと。ああ、全く以て忙しい！

…でも、やっぱりハッピーエンドの方が美しくて良いじゃないか！

——これは、人間の物語である。

——夢を見た。

一人の王がいた。

その王は黄金の剣を携え、数々の戦場を駆け抜けた。

王は最強の騎士たちを背後に従え、常に取りうる最適の策を用いた。

結果、王は多くの敵を打ち破り、多くの領土を納め、多くの民を守った。

王は常に正しかった。

人々は王に完璧であることを求め、

王もまた完璧であることを望んだ。

だからこそ、

——王には人の心がわからない。

その言葉が、重くのし掛かったのだろう。

王は、罪を犯した家臣に何の罰も与えなかった。

それが、家臣を苦しめているとも知らずに。

そして、叛逆は起こった。

本来、己が守るべき民であつた筈の人々を斬る

。共に戦つてくれた仲間も死んでゆき、嘗ての同胞を葬つていく。

滅びへ向かうブリテンの様。

それが理想のために前へと突き進んでいた王に突きつけられた現実。

彼女には耐え難いものであつた。

——己の存在を悔やんだ。あの時の選定は間違つていたのだ、と。

そして、王は願う。

民のため、国のため、アーサー王は王にふさわしくなかったのだ、と。

——問おう、貴方が私のマスターか。

その光景は、今でも目に焼き付いている。

月明かりに照らされ、血にまみれたその夜。運命に出逢った。

——ではシロウ、と。ええ、この発音の方が私には好ましい。

理想を掲げ、完璧であろうとした王は、一人の心優しい少女であった。

——《約束された勝利の剣》——!!!

しかし、彼女は確かに理想の王であり、その光輝は、とても美しかった。

——やり直しを。滅びてしまった国を救う為に、私の代わりになる人物を 選定し
なおしてもらおう。

それが王として剣を執った、私の最期の責務です。

それは違う、と。そう告げた。過去を変えるってことは、その時を生きてきた全
ての人々を否定することで、それはあつてはいけないことだから。そして、その理想は、
たとえ後悔したとしても、間違いなんかでは決してないから。

—— やつと気づいた。シロウは、私の鞆だったのですね

—— これでいい。聖杯を自らの手で斬り壊した以上、私は英霊ではなくなりまし
たが

—— はじめから、その必要もなかったのです

王は国を守った。ただ、国は王を守らなかつた

……まつたく。そんな当たり前の事を、どうして気づか なかったのですよね、シ
ロウ

……体が透ける、聖杯の恩英もなくなつた。これでようやく、私はあの丘に戻れる
最後に、貴方に心からの感謝と、ありつただけの親愛を

私が築こうとしたものは理想郷とはほど 遠く、万人を救う事はできませんでした
が

—— それでも 胸を張れるものだったと、 貴方は伝えてくれました

ありがとう。

その言葉を胸に、私は、あの丘から先に進みます

さようならマスター。

貴方の行く先に、光と希望があらんことを――

……最後に、一つだけ伝えないと

シロウ――貴方を、愛している

そして聖杯戦争は終わりを告げた。

決して忘れることのないその憧憬を胸に、俺は歩んでゆく……

――筈なのだが……

#

青年の視界には何も映らない。否、一つだけ分かることがある。

見渡す限りの砂、砂、砂。

……つまり、砂漠のど真ん中にあるということだ。

「……なんでさ……」

——とりあえず、状況を整理しよう。

俺——衛宮士郎はいつも通り早朝に起き、桜と一緒に朝食を作って、いつものように俺と桜と藤ねえの三人で朝食を食べた……藤ねえもいつも通り騒がしかった。

そして藤ねえ、桜、俺の順に家を出た。これもいつも通りだ。

普通に授業を受けて、一成と生徒会室で昼ごはんを食べて……

……そういえば、放課後は遠坂の家で魔術の講習をしたっけか。遠坂が少し前に行ったロンドンで出会った女の人について講習中も愚痴っていた。

……何度目だろうか？流石に相手の女の人に申し訳なさがこみ上げてくる。

そういえば、講習の後に確か……

「……なあ遠坂。この設計図みたいなやつ。これ、何なんだ？」

「そうそう！それについて丁度話そうと思ってたの！さっすが衛宮くん。魔術はからっきしだけど、こういうのには敏感なのね」

「む……悪かったな、どうせ俺はへっぽこだよ」

「もーそこ！拗ねないの。…全く、そういうところはいつまでも変わらないんだから…」

「？」

「それより！これは宝石剣の設計図。まあ衛宮くんにも解るように説明すると、遠坂の悲願でもある第2魔法——魔法については教えたわよね？つまり並行世界の運営が出来ちゃうっていう剣なの」

「なっ!?それって凄いことじゃないか!……でもわざわざ俺にそれを話すってことは……」

「そうなのよ。設計図を見ても理論とかややこしすぎてさっぱり。で、剣といえば衛宮くんかな……って。ほら、解析とか得意でしょ?」

「……………はあ。あのなあ、遠坂。いくら俺が剣に特化しているとはいえ、そんな簡単にどうにかなるものじゃないだろ…」

俺の指摘にどうやら凶星だったらしい遠坂は、顔を赤らめ

「なっ…そんなのわかってたわよ…けどほら、念のために…」

「……………わかった。けど、期待はするなよ」

そう言つて俺はその設計図を手にし、目を閉じていつものように唱える

「———トレース・オン 同調、開始」

すると、特殊な形をした剣のイメージが脳裏に浮かびあがってくる。これが宝石剣だろうか。俺はさらに意識を潜らせていく。

———ふと、夢の中のような浮遊感を感じる。

《どうか、彼女を…》

「!？」

その瞬間、膨大な魔力の光に包まれ…

———そこから先の記憶はなく、気がついたら此処にいた、と。

うん？つまりこれは、俺の脳みそでは及ばぬところで何かが作用して、結果的に並

行世界への移動——第2魔法が成功してしまったということだろうか？

よくわからないが、不味いということだけは理解した。遠坂は無事だろうか？そもそも巻き込まれたのか巻き込まれてないのかもわからない。

取り敢えず、見渡す限り遠坂も、誰もいない。

「まずは、誰かを見つけないとな……」

こうして俺は行き先もわからぬまま熱砂の上を歩き始めた。

——それが、長い旅路になるとは知らずに。

砂漠で遭難したら謎の生物に出会った

「……………のど、乾いた…」

そんな眩きも砂に吞まれて消えてゆく。

——砂漠で遭難した場合、動くより立ち止まって助けを待つ方が良いとされている。水が十分にならない状態で歩き続けるのは、脱水症状を引き起こしやすく、命取りであるからだ。

しかし、何事にも例外は付きものだ。例えば『世界』で遭難した場合。そこが砂漠であろうと、いや、砂漠だからこそ動かねばならない。

周囲に人影すらない、そもそもこの世界に人間がいるのかさえも判別出来ないこの状況で助けを待ち続けるのは愚策というものだろう。

——ただひたすら、あてもなくこの動く影すらない広涼とした砂の海を歩き続けてどれほど経ったのだろう。

時間の感覚を失い、一度立ち止まって振り返ってみれば、歩いてきた足跡は吹き荒れる風に拐われ、己がどこへ向かって歩いていったのかすら判らなくなる。

その在り方は何処か迷宮に迷い込んでしまったかのような錯覚を生じさせる。

吹き付ける風は、砂嵐と形容するには些か穏やかに過ぎるが、それでも視界を遮るには充分なものであった。

渇きや飢えを無理矢理押さえつけ、燃料を欲する身体をどうにか動かしていく。

歩いて

歩いて

歩いて

歩いて

歩いて

歩いて

——ついに「何か」を見つけた。

砂煙でよく見えないがそれなりに大型なものだ。

もしかしたら、住宅かもしれない。

逸る気持ちを抑え、慎重に足を進める。

それは一歩ずつ歩みを進めるごとに徐々に徐々に貌があらわになっていく。どうやら建物にしては妙に奇抜な形態をしているようだ。

なにか飛び出た前足のような部分

そして、上を方を砂煙の中目を凝らしてみるとうつつすらと人の大きな貌のようにも見える

——そう、それはまるでエジプトのスフィンクスのような……………

「……………」

正に言葉を失うとはこのことである。

そう、そこには居たのだ。在ったのではなく、居たのだ。

獣の足、

獣の軀。

されどその貌は獣にあらず。

それを形容するとすれば、やはり真つ先に思い浮かぶのは人の面。

——スフィンクスという名の生き物が。

「……………!?!」

確かに、英霊という存在がいる以上幻獣の類いもいるだろう。実際俺自身も一度だけ見たことはある。

思い起こすのはかつての聖杯戦争。

慎二のサーヴァント、ライダーとの決戦。

——月を射抜けとばかりに上昇したそれは、そのまま弧を描いて地上へと翼を返す。

夜の闇の中、光り輝くのは背から生やした翼を大きく広げ、尾と鬣とを風に靡かせながら、長く鼻筋の通った顔を此方へ向ける一体の幻獣。

ポセイドンの子であり、ペルセウスによってメドゥーサが退治された際、その断ち切られた首から滴り落ちる血からクリューサーオールと共に誕生したとされる存在。

——ペガサスである。

しかし、スフィックスのそれはペガサスのそれとはまたバクトルが異なるのだ。何せ人間の顔をしたライオンである。

姿はエジプトのスフィックスで想像出来るとしても、それが実際に生きている様子は理解し難い。

——現実味を帯びないその様を眺め、俺は焦燥に駆られる。

さて、一体どうすべきか。戦つて敵うような相手ではないのは目に見えている。あの時のペガサスと同程度と仮定して、並の英霊で互角かどうかレベルの怪物だ。俺が一人で突っ込んだところで一蹴されて終わりだろう。

宝具を投影すればあるいは………いや、流石にそこまで危ない橋は渡れない。俺だって多少分は弁えているつもりだ。こんなところで死んではならない。此処で死んだら何もかも報われない。

——俺には、果たすべき理想があるのだから。

幸い、あちらは砂煙でまだ此方の存在に気づいていない。今の内に………ふと、砂煙が止んだ。

……………。

完全に、目が、合った

落ち着け、俺。基本的に動物は飢えてでもない限りは、此方から危害を加えたり、

驚かせたりしない限りは襲ってこない筈だ。確か臨界距離、だったか？スフィンクスがどれくらいまでなのかは知らないが、それなりに距離はある。これ以上近づかなければ……

その時、スフィンクスが動いた。

まるで面白いものを見つけたかの様にじり寄ってくる。

——まずい。

一步下がる。そして……

「……………なんでさあああああ!!?!?」

走る。とにかく走る。全力で走る。

恐らくこれが体育祭であったのなら、ぶつちぎりで1位を取れただろう。皆、驚愕の眼差しを向けて拍手喝采を送ることだろう。

だが残念なことに、これは体育祭でもなければ観衆もゼロ人の追いかけてこころである。しかも相手は神話で怪物と恐れられた存在。もし、追い付かれて前足で蹴られでもしたら俺の人生は終わりを告げることだろう。

しかし、このままではジリ貧だ。慌てる脳内に無理矢理酸素を回し、考えを巡らせる。幸い、スフィンクスとの距離はそれなりにあったのでどうにか逃げられているが、刻

一刻とその距離は縮まっている。

それにしても……あのスフィックス。完全に俺のことを遊び道具としか思っていないようだ。推測ではあるが、その動きは速さを俺に合わせているように見える。

あの巨体のどこにそんな速さが、と衝撃を隠せないが今はそんなことはどうでもいい。

問題は、この状況をどうやって打破するのかだ。

まず、言葉での説得は意味をなさない。人の言葉を理解する程度の知能はもっているとしても、やめてくれと言って簡単にはいそうですかと立ち止まってくれるような心優しきスフィックスであるとは思えない。

何かを囿にするのも難しい。俺は今何一つ持っていない。というかそもそも、スフィックスに対して囿になりうるものが何かも分からないのだ。

……やはり、戦うしかないか。倒せはしなくとも、多少の足止め程度なら出来る筈だ。

「――投影、開始」

イメージするのは、最強の自分。

その手に握るは陰陽の夫婦剣――嘗て彼の弓兵が、俺に最後に見せた双剣である。色々と投影した中で妙にしっくりときたものだ。

振り返り、スフィックスと相対する……しかし、そこにスフィックスの姿は無く。

「っ……………!?!」

スフィンクスは『飛んでいた』。文字通り、飛翔していたのだ。これでは剣で応戦することが出来ない。思わず唇を噛む。そしてスフィンクスはこの時を待っていたとばかりに襲いかかってくる。

万事休すか、と思ったその時——『ソレ』は現れた。
ペシペシ

俺の足を叩いてくる『ソレ』は小柄な小動物のようできて、その中身は底のしれないナニカであった。というか結構痛いぞ。

俺がこの混沌とした状況に混乱しているなか、さらに妙なことが起こる。

スフィンクスが空中で静止し、『ソレ』の姿を目に留めると、踵を返して何処かへ去ってしまったのだ。

「助かった……………のか?」

俺は茫然としてスフィンクスの去っていった方角を見つめる。そこにはただ砂漠が広がるのみで、本当に何処かへ消えたようだ。

そして、足元に視線を移す。そこにはやはり謎の生物Xが此方を見つめていた。目は無いのに何故だかそうだと感じたのだ。

「お前が助けてくれたのか?……………ありがとうな」

やや躊躇いがちにその頭を撫でる。すると謎の生物Xは喜んだ——気がする。

どうやら敵意は無いようだ。此処でこいつの正体を考えていても仕方ない、と俺は改めて歩みを進める。

後ろを振り向くと

ととと

と謎の生物Xもこちらへ歩いてくる。どうやら付いてくる様子だ。まあ一人での旅よりは賑やかになって良いかもしれない。

#

再び歩き始めてそれほど経たない内に、その光景は現れた。

「あれは……人か！」

つい、安堵の息を洩らす。これでようやくこの世界について何かわかる。それに先程のスフィンクスからの逃走に加え、投影までしたのだ。流石に俺の身体も疲弊しきつていいる。そろそろ一旦どこかで腰を落ち着けたいとおもっていたのだ。

早速彼らのもとへ歩みを進める。しかし、

「何だ……？」

ようやく姿をはっきりと視認できるようになり、その光景の異様さに気づく。

武装した人々が相対しているのは、たった一人の少女。

人々は口々に

「我らが聖杯を取り戻すのだ」やら「魔術王にすべてを捧げるのだ」やらと声を上げながら少女に襲いかかっている。

「なっ……!?」

大人数でたった一人、しかも少女を襲うなんて。俺は次の瞬間、走り出していた。

少女は魔術師なのだろうか、何やら魔術らしきものを使っているようにみえるが、この大人数だ。全員には対応しきれていない様子だった。そして俺はふと、彼女の背後、砂煙に隠れて矢を放とうとしている一人の兵を見つける。

「危ないっ……!!」

「なっ……えっ……ええええ!!」

俺は咄嗟にその少女を庇うように覆い被さる。

「ちよつと、貴方! 私を何だと思っただけですか! どのどなたかは存じませんが、不敬……その怪我……まさか、私を庇って……?」

「……女の子が危ない目に合っていたら、助けるのは当たり前だろ? ……俺は大丈夫だから、さっさと逃げよう」

そう言つて立ち上がろうとするも、途端に視界がぐらつき倒れ込む。
「ええっ!?!ちよつと貴方——」

——そうして、俺の意識は深い闇へと落ちていった。

気がついたら神殿にいた

—— 青年がいた。

彼は平凡な青年だった。守るべき民のため、日々努力を続ける真面目な青年。特別、何かを語ることなどない。

—— しかし、たった一つ。その出会いが彼の運命を動かした。

—— 眩しかったのだ。その王の、その理想は。

—— そして、その美しさに

—— 私はきつと、どうしようもなく魅せられたのだ。

我が剣は彼の王に、そして我が身は剣となり、その王道を斬り拓いてみせよう。

そして青年は邁進し、若輩の身でありながら王の近衛にまで登り詰めた。

王は騎士達を従え、瞬く間に領土を拡大していった。

青年はいつの日か立派な騎士となり、彼の王に仕えることを誇りに思いながら

も、一つ。疑問があつた。

——その日、王は物見の塔で黄昏ていた私の元に現れた。其の従者も連れず、ひとり、ふらりと。

この王がいる限り、この国は平和であり続けるのだろう。

するとそうではない、と王は言つた。国土は変わらず荒廃している。キャメロットに人々を收容したとしても、それはひとの生活とは言えない。土地を耕し、日々を重ね、子を育ててこそ後の繁栄に繋がるのだと。

夕暮れのせいだろうか。そんな王に、私は問うた。

——何故、私のような取り柄のない騎士を傍に置かれているのか、と。

青年は確かに努力をし、邁進し続けた。しかし、他の騎士達に比べてどうしようもなく彼は劣っていたのだつた。

そんな疑問を柄にもなく口にした私に王は、ばかもの。と、そう告げた。

単純な強さや弱さで人の立場を決めてはならない。味方と敵、善と悪。それらは違うものであり、円卓もまた、一人一人の役目は異なるのだと。

——王は、侵略者は敵であつても決して悪ではないとそう言つたのだ。彼らの願いは善なるものであり、ならばいつかこの島で重要な役割を果たす時がくるのだろうと。

王は続ける

——人間である以上、争いは生じる。それが敵と味方に別れるのは利益と不利益によるもの。

私達は今、それが両極端の時代にいる。どちらかが滅びねば立ち行かない、冬の時代だ。

そんな中に強さだけで結ばれた円卓を作るなど、私は考えたくもない。

それでは悪に堕ちる。

我々は敵を倒すために結束したのではない。我々は同胞たちの明日の為に剣を取った。

……この地は多くの人々の夢で出来たものだ。いつかこのような理想の都を人間だけの手で作りたい。そういうった願いでかろうじて成立しているものだ。

だからこそ、卿のような騎士が要るのだ、ベデイヴィエール。私達では見落としてしまう人々の暮らしを、つぶさに感じとれる心細やかな騎士が。

——私には難しい話です。ですが、キャメロットの暮らしは私も好きです。

先日も、トーマスの家で子供が生まれました。双子の、とても愛らしい姉妹で——

青年の応えは余りに平凡で、だからこそ王は青年にその話をしたのかもしれな

い。

夕暮れに金砂のような髪が揺れる。

—— ああ、この王は己のことで笑うのではなく、他人が幸福な姿を見て、穏やかに微笑むのだ。

その時青年は心に誓った。

—— 何があろうと、私は彼の王を信じ続けよう。そして、いつの日にか王が、一人の人間として己の為に笑う姿を。

しかしその後……いや、もっと前から王の理想は少しずつ崩れていった。

宮廷では孤立し、

騎士たちからは疎まれ、

民からは恐れられてもお、

私情を見せずに常に理想であり続けた王の事を青年は誇りにさえ思っていた。

彼は己の誓いを守り続けた。王を信じ続け、傍に在り続けた。それは常に公平無私であろうとして誰にも本当の顔を見せない王の人間としての笑顔が見たかったためでもあった。

——だが結局、他のどの騎士より身近に控え王の顔を見続けても、彼の王が『笑う』事などただの一度も無かった。

#

——深い、深い微睡みのなかにいる。

ふと目を開けると、そこは荒野であった。
頭上には炎の空。

足元には無数の剣。

世界は限りなく無機質で、生きているモノは誰もいない。灰を含んだ風が、鋼の森を駆け抜ける。

剣は樹木のように乱立し、その数は異様だった。

実数など関係無く、人に数えきれぬのならば、それは無限であろう。

まるで墓標の様に広がるその異様な光景を、見たことのない筈のその光景を

——何故、自分自身と重ねてしまうのだろうか？

それに応えるように、何処からか幻のような声が聞こえる。

——ほら、だってそこには確かに在るのだから。

無限の剣の中に、佇立する一本の剣。

彼の聖剣が『人々の願いの結晶』であるとするならば、それはきつと、『少女の決意と理想』なのかもしれない。

歩みを進める。

その剣の輝きは彼の剣がそうであったように、決して、損なわれることなどない。

俺は、その輝きに触れようとして――

#

「……ん……………」

――太陽の光が差し込んでくる。

もう少しだけ眠りの余韻に漂っていたという欲を押し退け、両眼を開く。

どこかの部屋だろうか。眼前には天井が広がっている。

それをボーッと眺めながら、未だ働かない脳を必死に動かす。

そう、確か俺は気がついたら砂漠にいて……………歩いていたら、とんでもない怪物に襲われて……………なんとか凌いだと思ったら人を見つけて……………

そこまで思い出してはたと気づく。そうだ、あの時襲われていた少女を助けてそのまま倒れ込んだのだった。

あの聖杯戦争の時とはまた違った非現実感故に、まさかここは冥界なのでは、なんて思考が頭をよぎるがすぐに否定する。

流石にそんなことはあり得ないだろう。というか、俺にとつての冥界は遠坂のいる場所な気がする。あいつのうっかりで何度か本気で死にそうになつてるからな……

それに死んでいたら、すぐ傍に感じるこの温かな熱を感じ取れる筈……が……
すやあゝ

と、まさにそんな寝息がすぐ傍から聞こえてくる。慌てて上体を起こしてみると、一人の少女がとても気持ち良さそうに寝ていた。

よく見てみると、先程助けた少女のような気がする。きつと彼女が助けてくれたのだろう。

俺が怪我をした場所には、包帯が巻かれている。その歪な巻き方から、慣れないながらも懸命に手当を施してくれたことが見てとれる。

——それにしても、本当に気持ち良さそうに寝るんだな。

このまま微笑ましい光景を眺めていようかなどと考えましたが、そうは言ってもい

られない。

起こすのは非常に忍びないが、この状況を把握しなくてはいけない。俺は出来る限り優しく彼女を起こす。

「おい、すまないが起きてくれないか？」

「んっ……………いけませんフアラオ、そのように、私の髪を引つ張られては……………」

それは耳のように見えるかも知れませんが、ホルスを表した魔術触媒……………決して寝癖では……………はう……………」

……………思ったより厳しい闘いになりそうだ。というか、一体どんな夢を見ているのだろうか。

#

「なあああああああああああ!!!?」

——俺の数分間における激闘（？）の末にようやく起きた彼女が発した第一声がこれである。

流石にこれはこちらも困惑するというものだ。とりあえずパニックっている彼女を落ち着かせなくては

「お、落ち着いてくれ！」

「はうう……まさか、こんな姿を見られるとは……やはり私は未熟……この様ではファラオに顔向け出来ませぬ……」

何だろうこの感じ、パニックつた桜と少し似ている気がする。

「な、なあ」

「その貴方！」

「な、なんだ？」

突然の返しにやや気圧される。彼女は何故か顔を赤くして言う。

「さ、先程の不敬は特別に不問とします！だから、誰にも話すことはないように！良いですわね！」

「わ、わかったからその、色々と教えてくれないか？こっちは正直何がなんだか」

どこかぎこちないムードながらも、どうにか本題に辿り着くことができた。

「む、そうですか。確かに二日も寝ていて、いきなりこんな素晴らしい神殿にいては困惑もするというものですわね。では、特別に説明して差し上げましょう。ここはファラオ・オジマンディアスの偉大なる神殿です」

「ちよつと待ってくれ、俺が倒れてから二日も経っているのか？」

「ええ。その…貴方が私を庇って倒れてから敵を退けた後、このまま放っておくのもあれだったので私の部屋へ。怪我自体は私の治療でどうにかなったようですがなかなか目覚めず……」

「そうか………ありがとう、助けてくれて」

「えつ………ええ。当然ですとも、感謝なさい。」

少し驚き顔を赤らめた後、ふふん、と得意げに彼女は言う。

こういうところは、少し遠坂にも似ている気がする

「えつと話を戻すと、ここはファラオ・オジマンディアスの神殿って言ってたよな？ということは、この場所では今、聖杯戦争が行われているのか？」

オジマンディアス——確か、ラムセス2世とも呼ばれているファラオだ。俺が知っていることは、妻がネフェルタリだとか、あのモーセの出エジプトの時のファラオだったらしいとかその程度だが。

そんなファラオがいるってことは、必然的にここは紀元前13世紀頃のエジプトか、聖杯戦争が行われている地かのどちらかだろう。

遠坂に聞いた話では、冬木の聖杯戦争というのはマイナーではあるが、聖杯そのものはそれに類似したものが多く見つかっているらしい。冬木の聖杯が汚染されていたの

は特殊な例であつて、通常は願望器としての役割をちゃんと果たせるとか。

「聖杯ですか。確か聖杯ならば、ファラオがお持ちの筈ですが」

「へ？」

……何か、さらつとトンデモナイことを聞いた気がする。聖杯を持つてゐるだつて……？ということは、オジマンディアスとそのマスターが既に勝者だつてことか？

聖杯戦争はもう終わったのだろうか？……少し混乱してきた。見た感じでは、少女もそこまで事情は知らない様子だ。

「あ」

「どうしたのです？」

「——名前。君の名前をまだ聞いてなかつた」

「む、成る程。先程からの不敬な態度は、私の名を知らなかつたからなのですな。」

——我が名はニトクリス。キャスターとして現界したファラオなのです！」

「なつ、君もサーヴァントだったのか!？」

「今更ですか!?!というか、サーヴァントについて知っているなら貴方は魔術師なのでしょう? 魔力を見ればすぐに分かるのでは?」

ぐつ、痛いところを突いてくる。何せ俺は、遠坂が魔術師だつてことにすら気づか

なかったへっぼこ魔術使いだ。

まあ、サーヴァントかどうかの区別すらつかなかったのは、この地の魔力の密度が高くて感覚がやや麻痺しているのと、彼女の言動が俺の知っている英霊の姿とややかけ離れていたのもあるのだが。

それにしてもニトクリスか、正直余り聞いたことのない名だ。

——でもきつと、良いフアラオだったのだろう。

俺はニトクリスに向けて手を差し出す。それを見たニトクリスは不思議そうな顔をしていた

「ああ、これは握手って言ってな。挨拶をするときにするんだ。」

「成る程…では」

そう言ってニトクリスはぎゅっと俺の手を握る。

「改めて、助けてくれてありがとう、ニトクリス。俺の名前は士郎。衛宮士郎だ」

「ええ。こちらこそ、あの時助けてもらい感謝しています。…士郎」

ファラオとファラオと謎の生物と

「——ほう。貴様がニトクリスを助けたという者か」

神殿の玉座に佇むのは、一人の男性。

褐色の肌。

白を基調としながらも輝かしい装飾を身にまとうその姿。

瞳は太陽の如き色を持ち、その双眸で俺を品定めするかのようにつめる。

その風格から偉大な王であることが伺い知れる。

俺がそのまま立ち尽くしていると、褐色肌の少女——ニトクリスが我慢ならないとばかりに口を開く。

「ファラオの御前ですよ！頭を垂れなさい！」

「いや良い、ニトクリス」

ニトクリスを諫めたのはファラオ。しかし、ニトクリスは俺の態度に不満があるよう
で

「……ですが、貴方様は偉大なるファラオ、その御前で不敬など……」

「良い、とそう言ったであろう。」

それともニトクリス、貴様は余の命に逆らうと?」

「……っ! 申し訳ございません、ファラオ。深く反省致しました。このニトクリス、如何なる罰も甘んじてお受け致します」

それを見たファラオは暫く考えた後、

「……今そのなたを罰したところで面白くない。愚かな賊軍を我が力を借りずして打ち払ったことを評価し、特別に不問とする」

「はっ。温情、ありがたく」

このやりとりに俺もつい、安堵の息をもらす。二日も俺のことを諺てくれていたのだ。彼女が罰せられるとなればファラオが相手であろうと流石に黙ってはいられない。それに大方の責任は俺にあるのだから、罰せられるとすれば、彼女ではなく俺でなくてはいけない。

ファラオは再び視線を俺に向け、なにやら呟く。

「…しかし、カルデアの者ではない、か。であれば迷い込んだか」

するとファラオはおもむろに立ちあがり、声を大にしてその名を語る。

「我が名はオジマンディアス。」

ファラオは余であり、余こそまさにファラオの中のファラオ、太陽の王である!」

オジマンディアス——広大な帝国を統治した古代エジプトのファラオ。

外交や建築、武勇など様々な功績を残し繁栄をもたらし、民を愛し愛された王。

このファラオがエジプトに残したものは大きく、今もなおエジプト人に尊敬され続ける存在。

その威光は本物であり、その威圧感にやや気圧される。

……一言の中にファラオが入りすぎている気がするが、何も言わないでおこう。

そろそろ傾合いだろうか、俺はオジマンディアスに対して口を開く。

「……その、ファラオ・オジマンディアス。聞きたいことがある」

「許す。申すが良い」

「あなた、サーヴァントなんだろう？ マスターは何処にいるんだ？」

この神殿を少し見て回った限りマスターの気配などなく、すれ違ったのは使用人と思われる人々のみだった。

サーヴァントが此処に居を構える以上、マスターもこの神殿にいると思っていたのだが……

「ほう、妙なことを尋ねるものだ。

余にマスターなどおらぬ。余を呼び出した者ならば、殺した」

「なっ……!? 殺したのか!? マスターを!」

予想外の言葉に、つい声を荒らげてしまう。

「あのような下賤な輩、マスターではないと申しているだろう。」

……我が敬愛なる妻の遺物を用いるなど、万死に値する」

敬愛なる妻——ネフェルタリのことだろうか。至上の美をもつとされ、オジマンディアスが心から愛したただ一人の女性。

そんな妻の遺物を触媒に、オジマンディアスはこの地に召喚されたという。先の言葉から、それがどれ程彼の怒りを買ったのか伺い知れる。

「……しかし、解せんな。貴様、どうやら現状の把握もままならぬようだが、何故ニトクリスを助けた？」

その疑問に、俺は当たり前のように答える。

「?そんなの、当然のことだろ?」

その言葉を聞いた途端、場の空気が一変し、重い沈黙に包まれる。

ニトクリスはいつにも増しておろとし始めた。

そして俺の方を見て、目で『何をしたのですか!』と訴えてくる。

正直、俺も困惑しているのだ。

一体何が起こったのかわからぬまま、眼前のファラオを見据える。

すると暫くの後、オジマンディアスが口を開いた。

「——去れ。今すぐ、此処を去れ。死にたくなければな」

「なっ！フアラオ!?!それは一体……」

突然の言葉に、俺もニトクリスも困惑を隠せない。一体何があのフアラオを怒らせたというのだろうか。

「……貴様のその在りかたは人として間違っている。失せるがよい。貴様にする話などない」

——人として、間違っている、だって……?

その言葉に、俺が呆然と立ち尽くしていると、

ぺしぺし

「……ん?……お前こんなところまで着いて来てたのか」

そこにはいつものまにか、件の謎の生物Xが。……相変わらず脚を叩いてくる。自分の力がどれ程強いのか自覚してほしいものだ。

謎の生物Xは、その驚異の脚力で俺の胸に飛び込んできた——但し、その衝撃も物凄いものであったが。

「うおっ!？」

俺は思わず体勢を崩しかけるが、どうにか倒れずに踏みとどまった

「…全く、どんな馬鹿力してるんだ……」

溜息をつきながらこいつの頭を撫でる。力は強いが、挙動は小動物のようで意外と愛らしい。

ふと、横を見るとニトクリスが俺たちの方を見てなにやら口をあめぐりと開け、とても驚いていた。

何だろう、と不思議に思っていると、突然オジマンディアスが腹を抱えて笑いだした。

「フツ…フハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!あのスフィンクス・アウラードがなつくとは!

ようやく得心がいったぞ。よもや、**それほどに人でなしだったとはな!**

——それとも、中身など無いのか?」

——その言葉は、脳に直接届いてきたかのように、俺の心を揺さぶる。

「……………」

「まあ良い。赦す。」

そして光榮に思え、そなたがこのエジプト領に滞在することを許可しよう！」
先程といい、掴みどころのないオジマンディアスの機嫌に俺が戸惑っているなか、オジマンディアスは続ける。

「しかし、そなたを客人として迎える気はない。

——働け。日々の労働こそ人間のすべてである。

余の満足のいく働きを見せる限り、そなたはこの神殿に居座ることができ、それが出来なければ、貴様に明日は無いと思え」

#

二人だけとなった玉座の間で、ニトクリスは恐る恐る口を開く。

「……ファラオよ、本当によろしかったのですか？」

「ほう。何か思うところでもあるのか？」

「いえその……私がわたくしファラオのお許しを得ぬまま、黙って勝手に連れて来てしまったただの人間ですので……」

「此処を何処だと思っている？ 此処は余の神殿。そこに足を踏み入れた時点でそなたが何者かを連れて来たことなどわかっていた。しかし……ただの人間、か。それは違うぞニトクリス」

「？」

「……あやつは異常な程歪よこんでいる。あれは最早人間とは呼べまい。魔術師とも違う。寛大なる余ですら悍おそましさを感じた程だ。

……その顔では、まだ理解していないか。まあ良い、いずれわかるだろう」

オジマンディアスの言葉に虚偽などない。ニトクリスはそう信じているが故に、その言葉に戸惑う。

「……その。では尚更、何故あの者を？」

「……アウラードは余の魔力を与えた分身でもある。そのアウラードが、あやつを選んだのだ。あの者には果たすべき役目があると、そう感じた。……それに、ニトクリス。そなたが柄にもなく気に掛けたあの者が気になったというだけのことよ」

「い、いえ！ 私はあるような者など……」

「フツ、隠さずとも良い。ファラオたる余がわからぬ筈がなからう」

「そつそれは……」

ニトクリスが顔を赤らめたまま押し黙っていると

「……しかし、妙だ」

「一体どうされたのです？」

「十字軍は余が聖杯を奪い、弱体化した。このままでは奴らは聖地を奪うことなど到底叶うまい」

「それは良いことなのでは？ 聖杯がファラオの手に有る限り、この地は平穏であり続けるのですから」

「甘いな、ニトクリス」

「？」

「魔術王を騙る者が絡んでいるのだ。この程度で終わる筈がなからう？」

#

——
進め。

——
我が手に聖地を。

我等に祝福を。

——
我が道を阻む者は凡て殺し尽くしてみせよう。

——
斯くして ■■■ は咆哮をあげる。

その身を虚構に包み、

遙か彼方の聖地^{放郷}へと

何事も状況の把握は大切

——照りつける太陽の下、街は喧騒に包まれる。

日干しレンガで作られた建物が連なり、その間を多くの人々がせわしなく行き来している。

周囲を見渡せば、酒を飲みながら談笑する人々、無邪気に駆け回る子ども達。洗濯をしている人や香辛料を売っている人。

街は活気があり、中には高齢な人の姿も見受けられる。

その光景に、俺は衝撃を受けていた。

——古代エジプトってこんなだっけ!?

古代エジプトの人々の生活はなかなか焦点があたることも少ないが、やはり有名なのはピラミッド労働だろう。

年中奴隷のように石材を運び続け、建設に携わる。

それを何年も続けるのだ。その過酷さは筆舌に尽くし難い。

そこで負傷してしまう人々も多く、古代エジプトの人骨の多くは骨折の跡があったとか。

それゆえ、エジプト人は短命であるとまで言われていたのだ。

それを知っているがゆえに、眼前の光景が余りに想像と乖離し、衝撃を隠せない。

——いや、確かにパピルスには二日酔いなどを理由にピラミッド労働を休んだ人もいたと書かれていたというが。それとこれとはまた違うような……

そこまで思い至ってはたと気づく。

——そうか、今この地には「建てるべきもの」がないのか。

古代エジプトの民衆の仕事といえやはり建築が浮かぶが、その建築の必要性がない今、人々の暮らしは思っていたものよりも普通のものなのかもしれない。

……むしろ、古代エジプトにおいて建築がこれ程人々の生活を左右していたのだと考えると恐ろしくもあるが。

「ふふつ、驚きましたか？これが栄華を極めた古代エジプトの姿です」

いつのまにか隣にいて自慢気に語るのはニトクリス。

「ああ。俺はてつきり神殿か何かの建設でも手伝わされるのかと思ってたよ」

「確かに古代エジプトでは建設に関わる重労働が日常化していたのは否定出来ませんが、さすがこのエジプト領は建設王ともよばれるファラオが作られた土地。ファラオの御力によつて既に完成しているため、人々はその恩恵を享受して暮らしているのです」

「ん？ちよつと待つてくれ。『作つた』つてどういうことだ？」

「言葉通りの意味ですが？ファラオは十字軍から聖杯を奪い、このイエルサレムの地にエジプト領を作られたのです」

「イエルサレム!?!」

突然の衝撃事実には驚きを隠せない。てつきりテーベやカイロだと思つていたのだが。

そういうえば、すっかり失念していた。俺はオジマンディアスに此処が何時の何処で、今何が起こつているのかを教えてもらおうとしていたのだった。

しかし怒らせてしまった矢先、今オジマンディアスにそれを訊ねるのは憚られるというものだ。

「……………なあ、ニトクリス」

「？」

「その、わかる範囲で良いからこの世界について教えてくれないか？」

「良いですが……………妙なことを訊ねるのですね」

「そうだった。俺はまだニトクリスにも俺が並行世界の住人であると告げてはいなかった。」

「伝えようかと口を開きかけるが、思い留まる。」

「俺が古代エジプトの光景を見て混乱しているだけで、実は同じ時代の違う場所——
——並行世界への移動ではなく、ただ転移してしまっただけという可能性もある。」

「話を訊いてからでも遅くはないだろう。」

「ああ。すまないが、よろしく頼む」

「えっと、この世界についてですね。まず、ここは西暦1273年のエルサレムです」

「この地がエルサレム——エジプトではないのには驚いたが、時代を知った衝撃はそれを上回るものであった。」

1273年。俺のいた時代から730年近く前の時代だ。

これでほぼ俺は並行世界、しかも過去の時代にやって来てしまったことが確定してし

まった訳だ。

——自分のいた世界の過去にタイムスリップしたとも考えられるが、遠坂によれば過去で何かが変われば——俺がこの時代にやって来た時点で、その世界は既に自分のいた世界から分岐した並行世界と言えるらしい。

「次にエジプト領についてですが、事はイエルサレムに聖地奪還のためやって来た十字軍が、ファラオ・オジマンデアスを召喚したことから始まりました」

この年の十字軍となると、恐らく八回目か九回目辺り

——十字軍が終わりを迎えるころだ。

第八回は確か、フランスのルイ9世が出兵したものの途上で死亡してしまっただったか。

第九回は、マムルーク朝がアンティオキアを陥落し滅亡させたことがきっかけでイングランドのエドワード1世とルイ9世の弟シャルル・ダンジューがアツコンに向かったが、結局成果を収めず撤退。

その後十字軍国家は急速に衰退の途を辿り全滅

——まさしくこれが、最後の十字軍といえる遠征だろう。

「十字軍は土地を焼きながら聖地へと向かっており、それを見兼ねたファラオが聖杯を十字軍から奪い、その力をもってしてエジプト領を作ったのです」

土地を焼いた？

確かに十字軍は本来の目的を見失っていた節もあるが、侵略はまだしも土地を焼くなんてことをするのだろうか。

やはりこの世界の十字軍は俺の知る十字軍とは何かが違うのかもしれない。

「ん？もしかして、俺がニトクリスと出会ったときに戦ってたのって……」

「ええ。恐らくは十字軍でしょう。ファラオから聖杯を取り返そうとやって来たようでしたが……」

ええ。あのような不敬な者どもは、ファラオの御力添えなくして私が倒してみせましたとも！」

と、得意気に語るニトクリス。

あの大人数を相手にして勝ったのだ。やはり彼女もサーヴァントなのだなど実感する。

すると、ニトクリスはふと何か思い至ったのか視線を逸らしながら呟く。

「いえ……その……とはいえ私が潜兵に気がつかなかつたのも事実……私は未熟とはいえフアラオ。」

あの程度の攻撃ならば、たとえ受けたとしても平気ですが……それでも、貴方には感謝していますと」

「そんなに気にしなくても良いって。大したことなかったんだし。だから、

——傷ついても良い、なんて言わないでくれ」

「……!!」

ニトクリスは顔を赤らめて固まった。

暫しの沈黙に耐えかね、俺は口を開く

「……おい、ニトクリス？大丈夫か？話の続きをだな……」

「……はっ！そうでした。えっと、話の続きですね！」

「ああ。十字軍は確かあの時魔術王がなんとらとか言ってたよな？あれって……」

「私もよくはこの世界のことを知りませんが、それでも見当はつきます。

魔術王——そう呼ばれるであろう者といえ、魔術の祖とも謳われる彼の王

——ソロモン」

旧約聖書に登場する、魔術の祖と謳われイスラエルを最も発展させた古代イスラエルの第三代王。

「ソロモンの大いなる鍵」「ソロモンの小さな鍵」なども有名で、「ソロモンの小さな鍵」は72柱の悪魔の召喚及び使役について書かれているという。

ある時、ソロモンは神に「汝の望みを叶えよう」と言われた。

そこでソロモンは黄金や権力ではなく知恵を求め、この返答こそが「真の叡智」に至る資格の証左であるとして満足した神から十の指輪を与えられた。

それが有名なソロモンの指輪。

しかし、彼の王は魔術を使わないまま魔術の王として近隣諸国に名を広め、賢王のままこの世を去った。

——神代を終わらせ、これからは人間の時代だとそう告げるかのように。

……しかし、魔術王にすべてを捧げるだったか。

確かにイエス・キリストはソロモンの子孫にあたる存在だと言われている。故にキリスト教徒である彼らがそう言うのもわからなくはないのだが、彼は異国の妻が原因で異国の神々に従うようになり、主の怒りを買ったとされ、キリスト教徒の中にも彼に対して厳しい意見を持つ人もいたとか。

やはり讚えるとなればソロモンよりも、イエス・キリストの方がしつくりくる。

「うーん。やっぱり聖杯が関係してるのか?」

「考えごととも結構ですが、着きましたよ」

俺たちが到着したのは、比較的大きな建物。中からは喧騒の音とともに酒と食べ物ของ香りが漂ってくる。

「此処ってもしかして…」

「ええ。食堂です。皆で酒を飲み、語らう場。当時のエジプトにはこのような場は少なかったのですが、この完成された街だからこそ必要になったという訳なのです。しかし、なにぶん人手が足りておらず……土郎、料理の経験は?」

「一応、それなりに」

環境が環境だったので、俺はほとんどの家事を小さい頃からこなしていた。

それくらいしかやることもなかったのだ。特技と言える程度には出来ているつもりだ。

「ふふつ。私の見立ては間違っていないかったということですね！

貴方にはこれから基本的に此処で働いて貰います。よろしいですね」

「ああ。わかったよ。ここまで世話になってるんだ。精一杯働くさ。」

——じゃあまたな、ニトクリス。此処まで連れてきてくれて、あと色々教えてくれてありがとう」

俺は彼女と別れ、仕事場へと足を踏み出す。

——こうしてエジプトでの日々は始まった。

料理は良い文明

「さて……あれから一月。無事だとよいのですが……」

ニトクリスはエジプト領の街の中を歩んでいた。

行き先は勿論、この街唯一の食堂。

一月前に出会った土郎が働いているはずの場所だ。

ニトクリスはエジプト領の守護という任務もあり、ファラオ・オジマンディアスの許可なく訪れることは躊躇われなかなか顔を出せずにいたが、今回様子見をファラオ・オジマンディアスに命令されたのだ。

ちなみに街中に突如ファラオが現れては人々が混乱するだろうとニトクリスは白いローブを纏っている。

食堂の亭主であるダリルは厳しい人物だ。必要ないと判断されれば追い出されても可笑しくはない。とはいえダリルもあまり表には見せないが心優しい一面もあるという。土郎を見捨てるようなことはないだろうが、それでも心配なものには心配なのだ。

それに、今回の様子次第でダリルは見捨てていなくともファラオ・オジマンディアスが不要と切り捨てる可能性もあるのだ。

そんな不安感を抱きながらも、ついにニトクリスは食堂に辿り着く。

「——へ？」

食堂の前——そこには老若男女関わらず大勢の人々がたむろし、列を成していた。想像以上の盛況っぷりに開いた口が塞がらない。古代エジプトでこれほどまでに人々が集うことなど滅多になかったのだ。

「なっ、前と比べてなんとという盛況っぷり!? これは…」

「ん? ニトクリス?」

食堂から顔を出したのは見覚えのある赤みがかった髪と琥珀色の瞳の青年。

「土郎!」

良かった。どうやら彼は無事だったようだ。先程までの不安は払拭され、思わず安堵する。

「よく考えてみると久しぶりだな。もう1ヶ月位経つのか」

そうですね、とそう応えようとした矢先、食堂から人影が飛び出してきた。

「シロウー!!!」

人影はそのまま土郎に勢いよく飛び付いた。

「うおっ! ……つてニーナか。仕事はどうしたんだ? ダリルさんに怒られるぞ」

「ううん。マスターに休憩もらったから大丈夫!」

士郎にニーナと呼ばれたのは黒髪で藍い瞳をした褐色肌の少女。

「全く……ダリルさんも子供には甘いなあ……」

「シロウが言えたことじゃないでしょ。シロウはみんなに甘すぎるんだから……この前のことだって……」

「あー、あの時は悪かったって。それより、レリスさんがニーナのこと褒めてたぞ。また接客の腕が上がってるんじゃないか？」

「えへへ」

士郎が少女の頭をくしゃつと撫でる。すると少女は嬉しそうに笑っていた。

「な……」

「？」

「何を少女とイチャついているんですかー！！？」

「別にイチャついてなんかいないぞ？……そうだよな？」

「……うん！」

間の抜けた顔で否定する士郎と、よくわかっていない様子の少女。

「だからそれがイチャついていると……はあ」

此方はずつと心配していたというのにこれである。士郎が相変わらずなのは安心したが、此方の心配も余所に少女と戯れられていれば込み上げる思いもあるというもの

だ。

「ねえシロウ。あのおねーさんって……」

「ああ、そつか。そういえば初対面だったな。……うーむ」

士郎はふと何かに気づき、考え込む素振りをした後、ニトクリスに近づき

「……なあ」

「？」

「今更だけど、真名でいいのか？いや、俺の知ってる聖杯戦争ではみんなクラス名で呼んでたから」

思わぬ質問にニトクリスはわずかに首をひねる。

「良いと思いますが？私はファラオ。少なくともエジプト領においては私の名は知れ渡っているも当然ですから。……当然、ですよね……？」

街中へはあまり足を踏み入れず、今も身を隠していたためにニトクリスは思わず不安に駆られる

一方、その答えを聞いた士郎は安心したようにうなずいた後、少女の方を振り向き

「そうか。ニーナ、彼女はニトクリス。俺を助けてくれた人で、ファラオだ」

それを聞いた瞬間、少女の藍い瞳が驚愕で見開かれる。

「えーあのニトクリスさまなんですか!？」

期待の眼差しを向ける少女。ニトクリスはその視線を受けて自信を取り戻したかの
ように応える

「……ええ！あのニトクリスですとも！」

「わあくはじめて見れた！お会いできてうれいす！」

少女から向けられる尊敬の目差しにニトクリスはまんざらでもない様子で

「ええ！ええ！そうでしょうとも！ふふっ」

先程の不安げな様子は何処へやら。ニトクリスは少女の頭をなでなでし始めた。

するとその少女が自己紹介をしていないことに気づき、

「私、ニーナって言います。シロウに拾われて今は此処でうえいとれす？をやってます

！」

「そうだよね？と、慣れない言葉を不安そうに士郎に確かめるニーナ。

「そうそう、ウエイトレス。と、士郎はうなずく。

「拾った？」

「ああいや、別に拾ったつもりはないぞ？ただ働いてみないかって誘っただけで」

「死にかけていた私を助けてくれたのがシロウとマスターなんですよ」

「全く……ニーナのことといい、この店の繁盛具合といい、一体一月の間に何があつたの
だか……」

「おい、シロー！ニーナ！」

と、店の中から二人を呼ぶ声が聞こえてきた。

「おっと、ダリルさんが呼んでる。行くぞニーナ」

「はいい！」

二人は急いで食堂へと向かう。すると、士郎が振り返り

「ああ、ニトクリス！良かったら何か食っていつてくれ！」

と言つて中へと消えていった。

他にも色々と聞きたいことがあったのだが、仕方がないだろう。

「…そうですね。折角やって来たのですから、士郎の腕を確かめなくては！」

#

「いらつしやい！……つてニトクリス様！シローとニーナが外にいたのはそういう訳か」

「お久しぶりです。ダリルも相変わらずですね」

食堂に入ったニトクリスのもとへやって来たのはこの食堂の亭主であるダリル。

「いえいえ……にしてもシローは凄いですよ。一体何者なんですかあいつは。俺達が考えもしなかった料理を作って、しかもとんでもなく美味いときた。お陰で店は大繁盛、一月前にオジマンディアス様には人手が足りないかと訴えたんですがね。まさかやって来た人手によってさらに人手が欲しくなるとは……いやはや、うれしい悲鳴ですよ」

「…ダリルも変わりましたね」

以前話した時と比べてどこか丸くなったというか、優しくなったというか。

「そうですか？ いや、以前はファラオに直々に食堂の主を命じられたプレツシャーで他の奴等にも厳しく当たってしまったんですが、シローの奴に『ダリルはいつも険しい顔をしているから、もっと普通にした方が繁盛するんじゃないか？』なんて言われましてね。少し気は楽になりましたけど」

その話に思わず微笑みがこぼれる。

「ええ。今のダリルはとても良い顔をしていますよ。しかし……それほどまでに美味しいのですか？ 士郎の料理は」

「そりやあもう。それを確かめるために来店されたんでしょう？」

そういつてメニューを差し出すダリル。

「そうですね………では——」

#

「——という訳で、士郎の料理はとても美味なもので……」

「——む。」

「街の人々も皆大変しあわせそうに……」

「——むむ。」

「それですね。このことから判断するに、士郎の働きは十分に評価に値するものかと……」

「——ニトクリス」

「は！何でしょうか、フアラオ！」

あれから神殿に戻り、ニトクリスは街の現状、食堂が繁盛していることや士郎の料理

の美味しさをファラオ・オジマンディアスに語っていた。

これでファラオが士郎を認めてくれると良いのだが、などと考えていた矢先、ファラオがその口を開いた

「——連れて参れ」

「はっ。」

「うむ。その料理とやらをこの神たるファラオに献上する栄誉を与えると申しているのだ」

……つまり、士郎の料理が食べたくなったということだろうか？

「かしこまりました！直ちに！」

#

「——ということなのです」

「オジマンディアスが、俺にか？」

再び急いで食堂へ戻り、ダリルに話を付けて士郎を呼んでその経緯を話した。当の士

郎は未だ状況を把握していない様子である。

「ええ！光栄に思いなさい！さあ行きますよ！」

そういつて士郎の腕を掴んで引つ張る。

「えつちよつと、いきなりか?！」

「仕方がないでしょう！私が『直ちに』と応えてしまった以上、すぐに準備をしなくてはアラオに顔向け出来ません！食材は一級品を大至急用意させましたから！」

全く有能なんだか、うっかりなんだか……

士郎は溜息をこぼしながらもニトクリスに連れられ、神殿へと足を進めた。

#

「ほう。これがそなたの料理か」

オジマンディアスの前に並べられたのは彩色鮮やかな料理の数々。

「アラオの口に合うかは分からないけどな。ま、取り敢えず食べてみてくれ」

オジマンディアスはうむ。と、その料理を口にする。すると、オジマンディアスは暫

く無言で食べ進める。

ニトクリスがファラオを怒らせないかとドキドキしながらその光景を見つめる中、オジマンディアスが口を開く。

「——美味しい」

「……そつか。良かった」

その言葉に士郎とニトクリスは不意をつかれたように少し驚き、そして安堵の表情をみせる。

「何だ、その顔は。ファラオたる余からの褒め言葉だ。光栄に思うがよい。よもや余がこのような言葉を口にするとは思っていなかったか？」

「まあ、確かにここまでストレートな感想がくるとは思っていなかったけども」

「余はファラオの中のファラオ。寛大なる王である。褒めるに値する成果をあげれば褒めるのは当然であろう？その程度のこととも出来ぬ器の小さい者が王、ましてやファラオの中のファラオなどと名乗れる筈もあるまい」

「流石はファラオ・オジマンディアス。王のなんとたるかを心得ていらつしやる……！」

オジマンディアスは少しの逡巡の後、口を開く

「ふむ、そうだな。そなたにはこの神殿にて料理を作り、余に振る舞う権利を授けよう」
いわゆる宮廷料理人、というやつだろうか。これはファラオ・オジマンディアスが士

郎を認めたということに等しい。しかし…

「……………」

「どうされたのです？フアラオに認められたのですよ。断る理由などないでしょう？」

「——いや。悪いがその話は断る」

士郎の口から発せられたのは拒否の言葉。

ニトクリスは驚き、オジマンディアスは士郎を見定めるかのように見つめる。

「なっ!？」

「——ほう。ではその故を申すが良い」

「ああ。……エジプト領は完成された土地だつて、そう言つてたよな。

——けど、この土地にも苦しんでいる人々がいた。飢えて死にそうな人、生きるために略奪を繰り返す人。そんな奴等を俺は知っている。

……別にエジプト領を否定している訳じゃない。苦しむ人々がいない世界なんて作るのは困難だ。古代エジプトにはそんな人々はもつとたくさんいただろう。それに比べればこの土地は遥かに良い場所だろう。けれど、それでも

——俺は目の前で苦しんでいる人々を、仕方がないと諦めることは出来ない。

あの食堂はやって来る者は拒まない。そしてやって来た客には必ず料理を食べてもらう。いや勿論、対価は必要なんだけどな。

俺はあそこでたくさんの人々を見てきた。苦しんでいた人々が『ありがとう』と口に
してあの食堂を去っていく光景を。

——俺はまだ、あそこでやるべきことがあるって、そんな気がするんだ」
暫しの沈黙の後、オジマンディアスが口を開く

「——名を。」

「え？」

「そなたから名を聞いたことが無かったと、そう思ったのだ」

「——士郎。衛宮士郎」

「そうか——では士郎、そなたを認めよう。好きにするが良い

——そして、己が正義を示せ」

理想と願いと現実と

「んっ……………」

差し込む太陽の光を感じ、いつもより僅かに重い瞼を開ける。

焦点の定まった視界に映るのはもはや見慣れた天井。

そして、スフィンクス・アウラードである。

「……………おはよう、アル」

もはや見慣れた光景だが、寝ている俺の上に乗っかるのはどうかと思う。

ゆっくりと起き上がり、水時計で時刻を確認して、慣れた手つきで手早く支度をすする。

一月前、ニトクリスにもはや説教に近い形で教えられたこの謎の生物Xの正体、スフィンクス・アウラード。なんでも凄惨な存在らしい。俺が今生きてるのはこいつのお蔭なんだとか。そんな命の恩人……………命の恩スフィンクスはなぜだか俺についてきていた。命を救われた以上、無下にオジマンディアスの元へ返す訳にもいかず、一ヶ月以上ここで共に暮らしている。名前はアル・カウンという。これはニーナが命名した。というのも、俺がずっとこのスフィンクス・アウラードを「こいつ」やら「お前」やらとしか言っていないので「シロウのことだから名前付けてないんじゃないの?」なんて質問を

されて凶星だった俺は名前が付いていないのも可哀想だったなと反省したものの、全くもって良い案が浮かばずニーナに頼ったのだ。アル・カウン——アラビア語で宇宙という意味だそうだ。こいつにぴったりの名前だろう。というか、今更だがサーヴァントはまだしも俺が普通にエジプト人と意思疎通ができるのは何故なのだろうか。知らない間に全自動翻訳魔術かなにかでもかけられていたのだろうか？………結構便利だな、それ。

「結局、まだ此処にいるんだな………気に入ったのか？」

アルの、スフィンクス・アウラードの個人的一番の謎は食事である。こいつには見たところ口とおぼしき部分は存在しない。アル・カウンの名のとおり中身が宇宙で構成されているのだとか。流石に何か食わせないと餓死するのではと危惧した俺は食事を作って置いてみたりしたのだが、結局食べなかった。そりゃあまあ、口がないので当然といえば当然なのだが。とはいえ気になったのであの後ニトクリスに訊いてみたところ、なんでも霊的なものを栄養とするらしい。それが判明したのは良いのだが、俺にはそんなものとはとてもじゃないが用意できない。そのせいでアルが変なものを食べてしまったたりするのも何が起こるかかわからず恐ろしかったので、ニトクリスやオジマンディアスであればアルの栄養分を用意できるだろうと一度神殿へ帰らせようとしたことがある。しかし、アルは全く帰ろうとしなかった。何回か繰り返しても結果は同じで、結

局俺の方が折れたのだ。

結局こいつが一月程の間に何を食べていたのか、はたまた食べていなかったのかは謎のままである。

とはいえこんなことを考えていても仕方がない。と、支度を終えて早足で仕事場へと向かう。

#

まだ人の気配のない食堂にやって来た土郎は、早速何時ものように朝食の支度を始める。此処で働く人々は色々と事情を抱えている者も多く、自分のように住み込みで働いている人も少なくない。土郎は朝の準備のついでといつて彼らの朝食を作るようになっていた。

料理をはじめて暫く経つた後、

「相変わらず、いい匂いがするな」

「おはよーシロウ！」

という声に振り向けば、ダリルさんとニーナがいた。二人はダリルさんが子供に甘いだけあつて仲も良い。が、屈強な軀つきをしたダリルさんとまだ幼いニーナが並んでいると凄いと絵面である。

「おはよう、二人とも。ニーナも今日は早いんだな」

そんな返しをすると、ニーナが俺の顔をじつとみつめてから不思議そうに口を開く

「シロウ、今日は浮かない顔だね、どうしたの?」

「へ?俺、そんな変な顔してたか?」

「うん」

何だろう、アルのこととかそんなに気になってたのだろうか。なんて考えを巡らせていると、

「夢……………かな?」

「どんな?」

「うーん、それはよくわからない」

何かを見ていたはずなのに、その中身はまるで砂のように掴み処がなく崩れていってしまう。

「でも、哀しい夢だった」

「そっか」

「シロウ、話は変わるんだが、さつきニトクリス様と会ってな、神殿へ行くようにとのことだ」

「ニトクリスがか?わかった。……………まあ、とりあえず朝食をつくらなとな」

作りかけの朝食に視線を戻し、料理を再開する。幸い既に7割程完成していたのです

ぐに全員分が出来上がった。流石に呑気に朝食を食べて行く訳にもいかず、やや少なめに作った自分の分を平らげ、ダリルさんに後のことを任せて早速神殿へと向かった。

#

「遠征？」

「うむ。遠征というほどの距離ではないが、そういうことだ」

神殿に着いた土郎がまず連れてこられたのは玉座の間——ではなく厨房だった。その意を汲み取った土郎は早速料理を始めた。実はこのようなことはあれ以来何度かあり、その度にフアラオへ料理を振る舞っていたのだ。今回の呼び出しもまた、同じことなのだろうと料理を振る舞ったのだが、どうやらそれだけではない様子だった。

「何か起こったのか？」

突然遠征を命じられたのだ。何か事情があるに違いない。

「知つてのとおり、我がエジプト領は広大な砂漠とそこに住まう守護者スフィンクスによつて隔絶された空間になっている。やつて来る者は精々余の力を知らぬ無知な愚か者か、そなたのような放浪者だけだ」

別に俺はなりたくて放浪者になった訳じゃないけどな……………そういえば、遠坂はどうしているのだろうか。この世界に来ていなければ良いが、もしスフィンクスや十字

軍に襲われていたら……いや、遠坂のことだから大丈夫か。遠坂は大事なときにうっかりこそしてしまうが、優秀な魔術師だ。ピンチを切り抜ける力は十分持っているのだ。むしろ俺の立場に遠坂がいたら、とつくに元の世界へ戻る方法を見つけているだろう。……遠坂、商売得意そうだから、金目のものには目が無いし。この世界でも上手くやっていける気がする。

なんてことを考えていると、郷愁の念が沸き上がってくる。藤ねえ、桜、美綴、一成……みんな元気にしているだろうか。元の世界でも一月以上経っているとしたら、迷惑を掛けているに違いない。学校は勿論、ねこさんのところのバイトも無断欠勤だ。そう思うと焦燥感に駆られるが、帰る方法がわからないのではどうしようもない。

「では士郎、隔絶されたこのエジプト領にて最も欠けているものは何であると心得る？」
欠けているもの……食糧は沢山ある。資源に困った試しは一度も無い。となると……

「……………情報、か？」

「左様。本来情報とは、人から人へと伝わり広がるもの。しかし外部からの干渉を無くした以上、その媒体である人は入ってこない。故に、情報が欠けるのだ」

「それなら、外部と干渉できるようにすればいいんじゃないか？今のところ襲ってくるような奴らは十字軍だけなんだろう？それならスフィックス無しでもオジマンディアスとニトクリスでどうにかなるんじゃないか？」

「失念しているようだが、ここは特異点……いや、そなたには聖杯戦争中と言うべきか。とにかく、そんな何が起こっても可笑しくは無い状況である。常に防衛を固め、民や領土を守るのは当然だ。それに情報が欠けていると言ったが、余がそれに関して何もしていない筈がなからう?」

「どういふことだ?」

「簡単なことだ。情報を運んでくる使いを用意しただけのことよ。やろうとすればイエルサレム全土を監視することも可能だが、なにぶん魔力の消費が激しい。聖杯の魔力供給こそあれど、この神殿の維持にも魔力は必要故、相当のことが起こらない限りは使わない。」

「……………つてことは、その情報使に何かあったのか」

「察しが良いな。彼らの消息が途絶えた。恐らく何かの争いに巻き込まれたとみえる。お前たちにはエジプト領の外へ出て何が起こったのかを調べて貰いたい」

エジプト領の外へ出る……………この世界にやって来てから一ヶ月以上の間、エジプト領の中しか知らなかった俺にとつて未知の領域だ。イエルサレム全土を巻き込んだ聖杯戦争。冬木の聖杯戦争とは明らかに規模が違うことは、このエジプト領を見れば一目瞭然だ。恐れは当然ある。しかし、どんな戦争であろうと関係のない人々が巻き込まれるのは許せない。それに、元の世界に戻る方法を探すためにもエジプト領を出ることは恐

らく避けては通れないことだ。余りにこの世界に滞在しすぎては帰れなくなる可能性もあるので、この遠征はこちらにとつても断る理由はないのだ。

それよりも気になったのは……

「お前『たち』？」

「士郎、そなたはお人好しが過ぎる——それが、偽善であろうとなかろうとな。一人ではどのような動きをするかわからぬ故、ニトクリスにも同行させる」

「俺は構わないけど、一度食堂のみんなに話してからでいいか？急に消えたんじゃ心配するだろうし」

「ふむ、良かろう。正午過ぎには出立する。それまでに用を済ませるといい」

#

「———ということで、そろそろ出掛けなくちゃいけない。迷惑を掛けるけど店は頼みます、ダリルさん」

「おいおい、此処は俺の店だぞ。『頼む』なんて言葉はいらないさ。だが——任しとけ。そつちもファラオの勅命だろ？エジプト領を出るなんて、この土地の民である俺には想像もできないが……まあなんだ、頑張れよ」

「ありがとう、ダリルさん」

ダリルさんなりの不器用ながらも優しい言葉に感謝する。ふと横に視線を移すと、

ニーナがその蒼い瞳に怪訝な色を浮かばせ、小さく呟く。

「……………帰ってくる？」

「ああ。」

「ほんとに？私、怖いよ。シロウがあのとときみたいに……………」

不安そうにしているニーナの髪をくしゃつと撫で、安心させようと出来るだけ優しく声を掛ける

「大丈夫だ。ニトクリスも一緒についてきてくれる。必ず、帰ってくるから」

「……………うん。お仕事、頑張つてね！」

顔を上げたニーナは込み上げる不安を必死に隠し、精一杯の笑顔で士郎を見送る。

「……………ああ。行つてきます」

そう別れを告げて神殿へと向かう。ふと、振り返ればまだ手を振り続けているニーナの姿を見て呟く、

「全く……………ニーナのこと、もう子供だなんて言えないな」

#

「あつつい……………」

「砂漠ですからね」

広陵とした熱砂の上をひたすらに歩む。オジマンディアス曰く、東北東へまっすぐに進めば良いらしいが、流石にこの砂漠で方角の感覚が狂わずにいるのは至難のわざだ。歩いている内に時間の感覚も麻痺してくるので太陽もそこまで参考にならなかつたりする。とはいえ、何の対策も無しに砂漠へ飛び込んだ訳ではない。当然といえば当然だが、方位磁石を用意してあるのだ。今のところ順調に進んでいるが、昼過ぎの砂漠の暑さは身に堪えるというものだ。

「ニトクリスは割と平気そうだな」

「エジプトに住んでいればそのうち慣れますよ。個人的には夜の寒さの方が堪えますね」

と、他愛ない会話をしているとふと、セイバーともこんな風に共に歩いていたな、なんて考えが頭をよぎる。

—— 瞼を閉じれば、浮かび上がるあの日の光景。

それは燃える街か、月夜の誓いか、忘れられない憧憬か。

それが如何様であれど、成すべきことは、果たさなくてはならないことは変わらない。

「——ろう、士郎！」

ニトクリスの声に俺は漠々としていた意識を前方へと向ける。するとそこには「此処が砂漠の終焉。そしてあの奥に見える村が、私たちの今日の目的地です」

#

「これは……………」

「……………」

その村は見るからに無惨な姿であった。あちこちの建物は瓦解し、木々もその多くが倒れ、争いの爪痕が色濃く残っていた。

——これが戦争だ。

この村に刻まれた傷痕が、鳥にその死肉をついばまれる死体が、そう語っていた。「……………何者だ。あんたら。十字軍とやらの兵士か？」

そう尋ねてくるのは身なりもボロボロな男性。20代くらいだろうか。背後にいる女性と彼女が抱き抱える赤子を守るかのように立ち塞がり、こちらへ敵意を剥き出しにしている。

「いえ……………私たちは友人を探しにきたのです。この村に滞在しているとのことでした

ので……」

ニトクリスがそう答えると、その男性は気が抜けたように

「ああ………あんたらもそういう奴らか。………勝手にしな……」

そういうって立ち去ろうとする男性を引き止める。

「待ってくれ……一体、何が起こったんだ？」

「あんたら、そんなことも知らないでやって来たのか？………まあいい。流石にあんたらでも、噂くらいは聞いたことあるだろ？——十字軍が土地を焼いて聖地へ向かってるっていう。この村は奴らに襲われたのさ」

「………そいつらは、今何処に？」

「さあな。今頃は聖地で戦争でも始めてるんじゃないか？」

「………っ！」

思わず駆け出そうとする士郎の腕をニトクリスが掴む。

「待ちなさい!! 気持ちばかりですが、此処からは急いでも歩いて2日はかかります。それに、ファラオ・オジマンディアスの命令はエジプト領の外で何が起こったのか調べることに。決して十字軍を倒せなどとは命じられていないのです。これから先は夜。この時代はまだ悪霊どもが跋扈していても可笑しくはありません」

「けどっ………っ！」

「……いいから落ち着きなさい………お願いだから…」

「……………わかった。じゃあ俺は、寢床を探してくるから」

沈黙の後、静かにうなずいた士郎はそのまま村の中へと歩きだす。その後ろ姿を眺め、呟く

「——あなたは、どうしてそこまで……」

#

「——トレース・オン 投影、開始」

意識を集中させる。

創造の理念を鑑定し、

基本となる骨子を想定し

構成された材質を複製し、

制作に及ぶ技術を模倣し、

——ウ

成長に至る経験に共感し、

蓄積された年月を再現し、

——口ウ

あらゆる工程を凌駕し尽くし——

——シロウ

「があっ?!?つ——」

込み上げる痛みを堪え、深く溜息をついて呟く

「……………また、失敗か。鍛練が足りないな…」

「士郎、今のは……………」

声のする方を振り向けば、そこには不思議そうな顔をしてニトクリスが立っていた

「ニトクリス、来てたのか」

「先程の魔術は投影魔術、ですよ。しかし、投影にそれほど使い道はない筈ですが」

そうか。そういえば、まだニトクリスには投影についての話をしていなかったな。遠坂には『士郎の魔術は特殊なんだから、他言は無用! いいわね!』なんて言われたのだが、見られた以上は仕方がないだろう。それに、ニトクリスにならば話しても良いと、そう思った。

「俺は精々三流がいいところの魔術遣いだ。けど、俺には一つだけ出来ることがあった」
そういつて手元へ意識を戻し、唱える

「トレース・オオン
投影、開始」

すると手元には黒塗りの中華剣が現れた。

「これは……宝具!?!」

「ああ。さつきは失敗したけどな。俺に出来る魔術はこの投影と、あとは強化くらいだ。しかし……なんで今は成功したんだろう」

「…先程の士郎は、なにか焦っているように見えました」

「……………そうだな。こうして毎日鍛練をしても、それだけじゃ理想には近づけないって、そう突きつけられている気がしてしまう」

「理想——ですか」

「……………笑うなよ」

「?ええ」

不思議そうに首をかしげるニトクリスに、士郎はその理想を語りだす

「——正義の味方に、なりたいんだ」

「……………ふふっ」

「む……………笑うなって言っただろ…」

「いえ……………士郎らしいな、と。それで、何故正義の味方に?」

「ああ。……………そうだな。その話をする前にまず、言い忘れてたけど」

「?」

「俺は、別の世界からやって来た。俺自身、何故此処にいるのかはわからないんだけどな」

「そうなのですか」

「…あまり驚かないんだな」

「薄々ですが気づいてはいました。並行世界を移動する神秘も存在すると聞きますし。それに、場所はまだしも時代を訊いてくるこの世界の人間なんてそうそういませんから」

そう苦笑混じりに語るニトクリスに、思わず此方も苦笑してしまふ。

「あー、それもそうだったな……話を戻すと、嘗ての世界で俺は、とある大火災に巻き込まれたんだ——」

——そこは、地獄だった。

炎の中を、ただひたすら歩いている。ふらふらと歩き、助けを求める声に耳を塞ぎ、あてもなく彷徨う。

「この子だけでも、と瓦礫の下から子供の骸を出し、死んでいる事にも気づかぬまま助けを求める誰かの親がいる。死にたくないと言わぬ声がある。自分が助かる事だけに一杯で、それら全ての声を黙殺して——ひたすらに歩いていく。罪悪感に潰れそうになりながら。」

生きて、と告げて燃え盛る炎から守ってくれた誰かがいた。逃げろと、落ちてくる瓦礫から庇ってくれた誰かがいた。だから、必死に生きようとしていた。今にも溢れそうな涙を堪えて、唇を強く噛みしめ、もうボロボロで動こうとしない足を引きずりながら必死に歩いていた。

空に穿たれた黒い孔を見上げ、歩き続ける。やがて限界を迎え、その小さな体が倒れ伏す。

——希望なんて持たなかった。もう助からない。

呪いに焼かれた街と、炎に吞まれて消えた命。そんな悲劇の中、一人の少年の命が尽きようとしている。

——そこに、『正義の味方』は現れた

『生きてる！ 生きてる！ よかった、生きている！ ありがとう、ありがとう……！』
まるで自分が救われたように何度もお礼を言うその姿に俺は憧れた。

——しかし、その日■ ■ 士郎は死んだ。

身体は生きていたが、心が死んだのだ。

そして、そんな俺の前に衛宮切嗣は現れた。

『初めに言っておくとね——僕は魔法使いなんだ』

こうして俺は衛宮切嗣——じいさんに引き取られた。

じいさんはしよっちゅう家を開けて海外へ行っていた。俺は少し寂しかったが、じいさんの語る旅の話はとても面白かった。しかし彼は日に日に衰えていき、家から出ることもなくなっていくた。

『——子供の頃、僕は正義の味方に憧れていた』

『なんだよそれ。憧れてたって、諦めたのかよ』

不満げな表情の少年に、男は困ったような笑みを浮かべる。

『うん、残念ながらね。ヒーローは期間限定で、大人になると名乗るのが難しくなるんだ。そんなこと、もっと早くに気が付けば良かった』

『そっか。それじゃ、しようがないな』

男の悲しげな顔を見つめながら、少年は言った。

『ああ、そうだね。本当にしようがない』

その悲しげな顔を、笑顔にしたくて言った。

『うん、しようがないから、俺がなってやるよ。爺さんは大人だから無理だけど、俺なら

大丈夫だろ。まかせろつて、爺さんの代わりに俺が——』

『ああ——、安心した』

静かに瞼を閉じて、彼はその人生を終えた。

「——だから俺は、正義の味方にならないといけない」

「……………それが士郎の理想、ですか」

「ああ。…世界中から争いが無くすことがどれほど難しいのかなんて、わかってるんだ。けどせめて、俺の視界に映る人々だけでも救いたいんだ」

暫しの沈黙の後、ニトクリスが口を開く

「——私には、兄弟がいました。彼等はずっと心優しく、私たちはいつも幸せに過ごしていました。しかし、そんな平穏はいつの間にか失われていた。先王であった兄弟たちは、有力者達の手によって利用され、挙げ句の果てに謀殺されたのです。」

——許せなかった。ファラオを軽んじ、その座すら弄てあそぶ逆臣たちを。愛しき兄弟たる先王を慈悲なく謀殺した悪逆の徒

……………私は逆臣たち全員をナイルの流れの底に沈めて溺死させ、復讐を果たした後に死後の復活の備えもなく自ら命を絶ちました。

——これがニトクリスというファラオの生涯です」

「……………後悔しているのか？」

「いえ。後悔などは決して。ですが……………私はファラオという身でありながらも己の復讐の為にその立場を投げてしまった。私は未熟者なのです。

だからこそ……………ファラオとして最期までその役目を遂げたあの御方が、私には眩しいのです」

そう俯きがちに語るニトクリスを見て、士郎が口を開く

「……………オジマンディアスは、ニトクリスのことをちゃんと認めてると思うぞ？」

「え？」

「そうじゃなきや、ずっと傍にいさせないだろ？それに、俺もニトクリスはいいやつだつて知ってる。…過去に何があったとしても、今俺の目の前にいるニトクリスは優しく、心配性で、情に脆くて、面倒見が良くて、やるときはちゃんとやれる。そんな、みんなに愛されてるファラオだ。後悔はしてないんだろ？だったら胸を張って自分の人生は間違いないかじゃなかったんだって自信を持って生きていけばいい」

少し、息を飲む音、そして顔を上げたニトクリスが苦笑混じりに口を開く

「……………サーヴァントは基本的に死後の存在ですから、生きてはいませんが」

「む、それもそうだったな……………」

「——ありがとう、士郎」

「ん？何か言ったか？」

そう訊ねる士郎に、ニトクリスは微笑んで

「いえ、なんでもありません」

た
あの日、私は凡てを捨てようとした。それでも一つ、残したかった思いが、願いがあつた

——兄弟が、安らかに永遠の国で過ごせますように

「——太陽は、私に微笑んでくださっていたのですね……」

夜空を照らす月を見つめて、そう呟く

——それは、美しい夜であった

#

「……………ごめん、ニトクリス」
そう言つて、青年は駆け出した。

盲目の正義を掲げ、歪んだ理想を胸に。

——その果てに待つものを、まだ彼は知らない

サアケエイツ！

——私の中には、悪魔がいる。

一体何故、こうなってしまったのか。

確かに人をこの手で殺した。それも何人もだ。しかし、それはこの身が戦場に立つ以上仕方の無いことであろう。

勿論、そのことに対して何の感情も抱かない訳ではない。

忘れられる筈もない、私が初めて戦場に立ったあの日、襲いかかってくる賊軍を打ち払わんと剣を握り、今にも恐怖で崩れ落ちてしまいそうな震える足を抑え付けながら互いに名も知らない敵と相対した。

幸運だったのは、相手も戦いを未だ知らぬ少年であったことか。僅かに震える剣先を互いに向け合い、少しでもこの恐怖を打ち払おうと相手を睨みつける。

別に、殺してやりたいほど憎かった訳ではない。何せ、私と彼は出会ってから数分も経っていない。言葉すら一言も交わしていないのだから。それでも殺さなくてはいけないのだ。

——この世界が、そうやって廻っているのだから。

結末は、驚くほどあっという間だった。

意を決して襲いかかってくる少年の剣を私の剣で受け止め、振り上げてからがら空きの少年の胴体に一閃。何度も何度も練習したカウンターの流れ。それだけであった。

私はあの時の少年の顔が今でも忘れられない。あの、驚きと恐怖と悲しみと、そしてなにもかも諦めたような顔を。

彼が最期に呟いた名前前は誰だったのか、その答えは永遠に解らない。

——世界とは、余りに残酷である

何度も何度もこの手を血で染めていく内に、人を殺すということに対しての忌避感が薄れていった。罪の意識はあれど、それは仕方の無いことだと割り切れるようになるのだ。

しかし、それは戦場に立つ者であれば誰しもがそうであろう。そうでなければ戦場で生き抜くことなど出来ない。割り切れない者は総じて戦場で死ぬか、耐えきれず逃げ帰るのだ。

であれば、この悪魔は何なのだ。私の心を苛み、呪い続けるこの悪夢から、一体どうやって逃げれば良いのだろうか

魔術王？そんなものは知らない、知りたくなどない。

何故私が聖杯に選ばれたのか？わからない、何も、何もわからないのだ。

——ああ、しかし一つだけ、わかることがあるとすれば

私はただ、生きてかったのだ。

#

——アルトリア・ペンドラゴン

アーサー王。円卓の騎士の一人であり、選定の剣を引き抜き、不老の力を得たブリテンを統べる騎士王。

ヴォーティガーンを誅するために概念受胎と言う魔術によつて作られた赤い竜の因子を持つ存在。騎士道が花と散つた時代、聖剣を手にブリテンにつかの間の平和と最後の繁栄をもたらした。

清廉潔白、滅私奉公を貫いた王。その正しさに騎士たちはかしずき、民たちは貧窮に耐える希望を見た。万人にとつて善き生活、善き人生を善しとし、弱きを助け強きをくじく。まさに理想の王。

——ああ、それが彼の王だ。あいつは昔からそういうやつだった。王になる為に産まれ、王としての努力つてやつをずっと続けてきた奴だ。ずっと。言葉通り、24時間365日だ。

わかるか？朝から晩まで親父達と王になる為の厳しい鍛練を詰み、空いている時間があれば馬の世話やら、街の見回りなんぞをやっていた。

あいつは人々の暮らしを守ろうとしていたが、その人々の暮らしつてやつをあいつは

知らない。あいつは、あいつの守ろうとするものの実体験が無かったんだ。

—— 気味が悪い

おまけにあれだ。あいつはほんの数時間しかとらない睡眠の間ですら、花の魔術師様と王としての鍛練を続けていたんだと。……全く、極めつけにも程がある。そんな暮らしを10年も続けていたんだ。そりゃあ理想の王にもなるさ。

アーサー王の王道はひとにぎりの強者たちではなく、より多くの、力持たぬものたちを治めるためのものだった。

国よりも人を愛したアーサー王は、その為に人間性と、己の人生を封印したが、王の心は民には伝わることはなかった。

—— そりゃあそうだ。あんな夢物語、普通の人間ならば付き合える筈もない。

そういう意味では、俺もあいつらも頭が可笑しかったのかもしれない。何せ、王の理想が夢物語だと、そんなものは叶いなどしないのだと知りながらも彼の王の行為を是としたのだから。

—— モードレッド？ ああ、あいつの叛逆は違う。もつと単純明快な話さ。アーサー王もあいつも、結局は理想に裏切られたって訳だ。

『——王には、人の心がわからない』だったか? 言い得て妙だな。

——わかる筈がない。あいつに求められたものは王としての在りかたであり、「人の心」なんてものは王には必要無かったのだから。

——彼の王は、「人の心」を誰からも教わらず、王もまたそれを知ろうとはしなかった。

これを悲劇と言わずなんという。アーサー王の理想に欠けていたものが、人間誰しもが持ちうる自己愛だったなど!

王は人間を愛し、人々は己と大切な誰かを愛した。これではこの国が滅びるのも道理だ。

……別に、アーサー王を責め立てるつもりはない。彼の王は愛情つてやつを知らなかったただだ。

考えてもみろ、ウーサーとマーリンの夢物語。そこに愛があつたとも?

あいつらに一つ失念していた点があるとすれば、

あいつらが作り上げたのは、理想の王ではなく

「理想の王」を遂行する機械だったってことだ。

—— ああ、そうだな。もし、彼の王を心から愛するやつがいて、彼の王がそれに
応えることができたのなら——

いや、なんでもない。ただの、独り言だ。

#

——此処までか

一つ、重い息をつき、ソラを見つめる。

こんな自分にしては随分と頑張ったのだろうか、などと乾いた笑みを浮かべる。

——もはや頭も可笑しくなってきた私達の前に、あの王は現れた。なんでも街を焼き払った際に見つかった聖遺物とやらで召喚を試したらしい。その王は、遊び半分で召喚した部下達をあつという間に皆殺しにし、私の前に立っていた。

『——貴様が聖杯に選ばれた者か。ふん、腑抜けた面構えだ』

そう言つてあの王は聖杯を奪い取り、何処かへ消えていった。

私はただ逃げ続けた。遠征に出立した際と比べると余りに少ない人々を連れ、ただひたすら。それでも聖地へと向かつていったのは、私の最後の意地だったのかもしれない。

悪魔はいつの間にか消えていた。恐らく聖杯と共に消えていったのだろう。しかし、一度広がった呪いは解くことなど困難だ。一部の部下たちは魔術王の存在を信じ、聖杯を取り戻そうとあの王を追った。憔悴しきっていた私には、彼らを止めることは出来なかつた。

——そんな私達に、聖地の奪還など成し遂げられる筈もなかつたのだ。

聖地イエルサレムに遂に辿り着いた私達は、そこで待ち構えていた人々の猛攻になすすべもなく勢力を縮めていった。

そして今、私の前には剣先が向けられている。……何語だろうか。私には聞き取れない言語でなにやら罵声を浴びせている。

そうやって罵声を浴び続けて暫くすると、遂に一人の男が前に出て、その眼前に構える剣が私に向かって振り下ろされる。

目の前に迫る死の恐怖。私にはそれが恐ろしくて仕方がない。

——故にこそ、それは生存本能。

彼は願う

——生きたい

それは、この場の誰よりも純粹で。

不可能であるが故に、誰よりも強欲。

最後の希望は奇蹟のみ。

故に——
聖悪魔なる杯はその願残酷いを聞微笑き届んだけた

「——問おう、貴様は其処で死ぬか。それとも——我に従うか」

#

——
見えた。

その光明が。最果てが。

——
ならば、行かねばならない

人理は燃え尽きた。人々に残るは破滅の道のみ。

——ならば、私が成すことは唯一つ

「——私が、人類を救ってみせよう」

それぞれ道

「——顔を上げるがよい」

「はっ！」

顔を上げる。その視界に映り込んだのは美しい金砂の髪と深緑の瞳。彼こそが、私が忠誠を誓う君主。ついに、私は彼の騎士と同じ場所に立つことが出来たのだ。

「卿が……ええ、良い顔をしている。ランスロット卿の言った通りだ。」

——パースヴァル」

「はっ！」

「卿はこれより円卓の一員だ。随分と癖のある者も少なくないが、皆善き者達だ。——

——同胞と共に励むがよい」

そう言つて優しく微笑んだ王の顔を、今でも覚えている。

故に——私にはその光景が到底現実のものとは思えなかつたのだ。

「——よくぞ集まつてくれた。我が同胞よ」

厳かな朝焼けの元、我々円卓の騎士はその言葉を聴いた。

その声は間違いなく、嘗て仕えた主——アーサー王のもの。しかし、その声には優しさも慈愛も無くただ無機質で。あの日の微笑みを見せることは無かった。

「我が名は——獅子王」

「——」
その言葉は騎士達に何を思わせたのか。私の及び知るところではないが、私はこの時確信した。

——目の前に立つ王は、アーサー王であり。しかし、嘗ての騎士王では無いのだ。
「……………卿らに語らねばならないことがある。

——この世界は、じきに崩壊する」

王は語る、この世界の終わりを。それはひどく非現実的なもので。しかし、本当にこの世界は終わるのだと何故だかわかってしまった。

「魔術王を名乗る者の手によつて人理は消却された。あと半年もすればこの世界からはなにもかもが失われることになる。自然も、建物も、動物も、人間も。その全てが」

何処からか息を飲む音がする。私達はただ、王の言葉を待つことしか出来ない

「それは既に定まつてしまった運命。少なくとも私たちの力だけではその事象を変えることは叶わない。

しかし——それはあつてはならない。人類が滅ぶなど私が許さない。私は多く

の民を——人間を救うと誓った。ならば、この誓いを果たさなくてはならない」

無機質な声に初めて感情の色が見えた。しかし、私にはその色は随分と歪なものに感じた。

「では、どうすれば良いのか。私は魔術王に対するせめてもの対抗策としてこの聖槍を使うことにした」

聖剣ではなく聖槍、と王は言った。世界を繋ぐ光の柱。それで人類を救うのだと

「人の根は腐り落ちるもの。」

故に私は選び取る。決して穢れない魂。あらゆる悪にも乱れぬ魂。

——生まれながらにして不変の、永劫無垢なる人間を。

そして彼らを聖都にて保護し、『善良な人間の要素』として管理する。聖都は『世界の果て』となることで人理消却を免れるのだ」

——それが、本当に人類を救うということなのだろうか。

王の言葉に衝撃を隠せずにいると

「これは一を救い九を見捨てる行為だ。聖都の外の世界を切り捨てる行為だ。しかし、これが人類を救うために私が考えた最善の策である」

一を救い九を見捨てる——それは、余りに理想には程遠く、それでもそこには人類への愛と苦悩が感じ取れた。

そして獅子王は円卓の騎士たちに宣言する。

「私が卿らを招集したのは、この計画には卿らの力が必要だからだ。私一人では敵を滅ぼす事はできて、聖拔は行えない。手足となる騎士が必要だ

——だが。

この行為が、卿らの信条とは相容れぬものである事も理解している。私に従うか、我が元から去るか。あるいは、この場で一丸となり私を倒すか。

日没に答えを聞く。私が待てる猶予は、それだけだ」

#

私は悩んだ。その選択を。

獅子王に従う者はいらるだろう。獅子王を止める者もいるだろう。

その場合はどちらにせよ円卓の騎士同士の戦いになる。

ここから立ち去る者はいない。獅子王を否定するのなら、獅子王を誅さねばならぬ。

そしてそれは、獅子王に従う道を選んだ仲間との戦いを意味する。

獅子王の考えは余りに残酷で、それでいて優しさのあふれるものだった。それはなん

て歪な——愛。

王は変わってしまった……いや、もしかしたら変えてしまったのは我々円卓の騎士な

のかもしれない。

彼らは一体、どんな道を選ぶのだろうか……？

「……………現れなかったのはベデイヴィエール卿とギヤラハッド卿か」

ベデイヴィエール卿。王に古くから仕え、王の最期をただ一人見届けたという騎士。彼もまた、私と同じように低い身分から円卓の騎士まで登り詰めたのだという。

そしてギヤラハッド卿。私が補佐し続けると心に誓った高潔な騎士。本当に無欲な男だった。彼ならば聖杯とともに昇天したというのも領けた程だ。ああ、彼の最期を祝福と憧憬をもってして見届け、デインドランの隣に埋めたあの時すら、今や遠い昔のことのようだ。

——彼らは一体どんな選択をしたのだろうか。

#

「トリストアン卿」

空を見上げ、一人悲しそうに佇んでいた彼に声を掛ける

「パーシヴァル卿……………」

「大丈夫ですか？ 顔色が余り良くありませんが」

「私は悲しい……………この状況を、受け止めなくてはならないことが。余りの悲しさに我が目を潰してしまいそうな程に」

それは本当に目を潰してしまいたいような、苦しそうな声だった。

「…私は未だ答えを出すことが出来ないでいる。故に、みなさん一人一人と言葉を交わし、己の答えを見つけようとしているのです。トリスタン卿、貴方は一体どうするのですか？」

「私は円卓の騎士です。彼の王に仕えると、そう誓った者。今度こそ、私は最後までその誓いを果たしたい。ああ、私は悲しい。きつと彼の王を止めるために彼の王を誅しようとする同胞を討ち取らなくてはならないなど…」

それは彼にはとても辛い決断。しかし、その決意は決して揺らがないのだろう。

「————そうですか」

私はあくまでもその決意を問いに来たのだ。彼等の決意を肯定したり、否定したりすることはするまいと心に誓いその場を離れた。

#

「ケイ卿———」

珍しくほとんど喋ることなく、ずっと押し黙っている様子の彼に恐る恐る話し掛ける「来るな、パーシヴァル。俺は一人で居たいんだ。邪魔するな」

その蒼い瞳にははつきりと拒絶の意が込められていた。

「貴方は、一体どうするのですか……？」

「…………お前に俺の言葉は必要ない。…………それともいつかみたいにもた俺に馬鹿にされたくて来たのか？」

嘗て、田舎育ちの私をケイ卿は馬鹿にしていた。誠の戦士にしか微笑まないという乙女クンネヴァールに私が微笑まれたことが癪に触ったケイ卿はクンネヴァールの頬を打ち、私が力づくで彼女への謝罪を求めたりしたこともあったのだ。

「いえ、ですが……」

「いいから来るな」

「……………わかりました」

彼とアーサー王は義理の兄弟だという。一体彼は何を思い、どんな選択をするのか。私には分からない。

#

「パロミデス卿」

円卓の騎士はその多くがヨーロッパの血を色濃く継いでいる。故に彼の異国を思わせる姿は分かりやすい。割と遠くから声を掛けたが、彼はすぐに気づいてくれた様子で「ん？……………ああ、パーシヴァル卿か。一体どうした？」

「いえ、ただその……貴方はどうするのかと」

少しの沈黙の後、彼は口を開く

「……………俺は、嘗てキリスト教の洗礼を受けたとはいえイスラム教徒として生まれ、育つた。君達のような生来のキリスト教徒とは価値観も生き方も違う。一つ言えることがあるならば君達の騎士道と俺の生き方は違うということだ。あいつは、トリストアンは獅子王の側に付くんだろ？言わなくても分かるさ」

その表情には確信と、何処か悲しさがあつた。

「だったら俺はそれに敵対しなくてはな。別に昔の生き方を踏襲する訳ではないが、そういうものなのさ、俺とあいつは。それに残念ながら俺には獅子王の崇高な考えはよくわからないのでな」

少し皮肉気に話す彼は僅かに寂しそうだつた。

#

「ガヴェイン卿」

「おや、パーシヴァル卿。一体どうなされたのですか？」

どんな時でも変わることはない微笑みも、今は少し元気がないように見えた。

「私は卿の決断を問いに来たのです。ぜひとも訊かせて頂きたい」

「訊くまでもないことでしょうか？ 私の主はあのお方です。サーヴァントとして、円卓の騎士として主に仕えるのは当然のことですから」

その目に迷いは微塵も感じられなかった。

「しかし、『獅子王』ですか……やはり王は………いえ、このことは語りますまい。パーシヴァル卿、貴方にも選択の自由はあるのです。よく考え、そして

決断するといいでしょ」

「ええ、心遣いありがとうございます」

#

「ボールス卿」

私が背中から声を掛けると、彼は一瞬固まりその瞳が私の顔を捉えると何処か安心したような、しかし何処か気まずそうな顔をしていた。

「パーシヴァル卿……」

「問いたいことがある」

「ああ。いや、言わなくても良い。私達の仲だろうか？ ギャラハッドと君と共に聖杯を巡

る苦難を乗り越えたのだ。その程度のこととは分かるさ」

私達は嘗てペレス王を癒す為に聖杯探索へ向かった。ボールスは皆からとても頼りにされている男だ。道中、酷い孤独感に苛まれた私だったが、彼らと合流を果たした際にはとても安心したものだつた。

「そう……だな。ありがとう、ボールス卿」

「感謝されるようなことはしてないが……まあ、君はそういうやつだからな」

諦めたように笑うボールス。こんな状況でも彼は彼らしいのだと安心する。

「それで、貴方の答えは……」

「無論、私は王を止めます。確かにあの王は我らが嘗て忠誠を誓った、アーサー王だ。――

しかし、それだけだ。あのお方はアーサー王であっても、私が心から忠誠を誓い、我らが信じた王ではない。ならば、止めねばならない」

彼の言葉もまた、強い決意が宿っていた。

#

「ガヘリス卿」

道を歩いていると、何やら不満そうな顔をして彼が立っていた

「パーシヴァルじゃないか」

私が早速問いを口にしようとすると、それを遮るように彼は続ける

「いや、どうせ君のことだから『卿の決断をー』とか言いに来たんだろ？正直、そんなことよりも兄貴の恥ずかしい話とかしたいんだけど……まあ、そんなこと悠長に話せる状況じゃないよなあ」

いつものように愚痴でもこぼすのかと思いきや、話さない様子。すると私の顔を見て彼は口を開く

「……何？そんな意外そうな顔しちゃつてさ。俺は空気程度は読める人間だぞ？」

「それは悪かった。それで、卿は——」

「——戦うさ。正直言つて、獅子王の考えは気に食わないからな。人類を救うためとはいえあんなやり方は駄目だ。まだ諦めて最期まで目一杯生き抜いた方が幸せだね。……きっと兄貴達やガレスの奴はあちら側を選ぶ。あいつらしい選択だが、俺は認める訳にはいかない。ま、あいつらを倒して俺が一番強いんだって知らしめてやるさ」

そこには兄妹と戦うという強い意志と、隠しきれない悲しみがあつた。

#

「……………えつと」

……見つけた。ランスロット卿。湖の騎士と呼ばれる円卓最強とも言われる騎士。私が話し掛けるのをやや躊躇っていると

「……パーシヴァル卿、どうしたのだ？……いや、すまない。この場で我々がする話などわかりきっていたな」

「……」

「パーシヴァル卿。貴方は、王の選択をどう考える？」

まさか、彼の方から問うとは。少し焦るも素直にその答えを紡ぐ

「間違いではないが、正しくはないと。そう、感じました」

「そうか……そうだな。確かにその言葉は正鵠を射ているのかもしれない。だが、パーシヴァル。この状況は最悪そのものだ。王や我々円卓の騎士の力をもつても抗えぬ滅びの運命など……故に、王の考えは最悪の内の最善の手段だ。卿の言うように、正しくはないかもしれないがそうすることでしか民を救えないのだ。だから私はその罪を背負い……今度こそ王に私を断じて欲しい」

——自分の罪を償わせて欲しいと、確かに彼はそう言ったのだ。

「ランスロット卿……」

「……いや、卿がそう気にやむことではない。これはわたしの罪エウなのだから」

王は罪を犯した彼の騎士を罰することなく赦したのだという。それがどれ程彼を苦しめているのかは想像に難くない

#

「父上……いや、ペノリア王よ」

莊嚴な佇まいでいる壮年の騎士へ声を掛ける

「パーシヴァルか」

「はい」

「そなたは……いや、問うまい。お前のことだ。私の決断でも訊きにきたのだろう。――

――私は王と戦う。円卓の騎士の一員といえど私は『王』だ。嘗てのアーサー王には心惹かれるものが存在したが……まさか彼処まで果てるとはな。最果てに至り、何を目指すというのか」

父の言葉に困惑を隠せないでいると、彼は力強く笑って

「なに、心配は無用だパーシヴァル、我が息子よ。花の魔術師殿の力添えさえ無ければ、私はアーサー王には負けない。嘗て彼の王の選定の剣を折ったようにその聖槍も打ち砕いてみせよう」

――つい、口元が緩む。

「どうした？」

「いえ、実に父上らしい答えだなと」

そう、実に彼らしい。私は彼の息子で本当に良かった。

#

「ガレス卿」

甲冑姿の少女——しかし、彼女もまた騎士であるに声を掛ける

「パーシヴァル卿！ 一体どうされたのですか？」

「貴方にもその選択を問わねばと思ひまして」

少しの躊躇いの後、彼女は口を開く

「……私は、王に仕えます」

「……訳を訊いても？」

「はい。確かに私はどうするべきなのかずっと悩み、明確な答えを出すことが出来ませんでした」

そうだろう。彼女はとても感性の豊かな明るい少女だ。実に素直に己の道を走る騎士。故に、この単純かつ複雑な決断を下すことは容易ではないのだろう。

「敬愛するランスロット卿であれば、きつと王に仕える。彼は私にとっての理想の騎士です。その彼の選択を、私は信じます」

彼はランスロット卿を信じると言った。確かにそれもまた一つの考えだ。——

しかし、彼女の決断には彼女自身の意志がいささか足りない。彼女もまた、その身を滅ぼすことにならなければ良いのだが……

#

「アグラヴェイン卿」

佇立瞑目する血の気の薄い黒衣の騎士に声を掛ける

「…パーシヴァル卿か」

「貴方にお話が。少し良いでしょうか？」

「いや、その必要はない。私の決断を卿に伝える理由はないからな」

——その瞳は相変わらず感情を抑えた、冷たい瞳をしていた。

「……」

「——私は王に忠誠を誓った。それ以上、語ることは無い」

「……ええ、貴方に感謝を」

——しかし、そこには確かな熱が在るのだ。

#

「…モードレッド卿」

なんだかんだで最後になってしまった。叛逆の騎士、アーサー王を討ち滅ぼそうとした者。彼が何故そんなことをしたのかは私には分からない。

「なんだ、パーシヴァルじゃねーか。どうした？どーせくだらない話でも始めるんだろ

「？」

「……ええ、貴方にも問わねばなりませんね。モードレッド、貴方は一体どんな選択をしたのですか？」

「あ？なんだよそれ。なんで俺がアンタにそれを言わなきゃならないんだよ。とゆーか、なんでわざわざそんなこと訊くんのだ？」

「私は未だ答えを出せないでいる。故に皆さん一人一人から話を聞いて——」

「嘘だな」

「……え？」

予想外の言葉に、驚きを隠せない。

「お前のそれは本音じゃないだろ？ 大方ほんとはもう決断してて、その選択が正しいものなのか確かめたかったってところだ」

「……何故、そう思うのですか？」

「その目だ。アンタの瞳はもう覚悟を決めてるやつのもんだ。……あとは勘だよ、勘」

「……なるほど。貴方の直感はその王に通じる部分がありますからね」

これは降参だ。私が彼を最後にしたのはもしかしたらこれを危惧していたのかもしれない。

「……で、アンタはどうするんだ？」

私の出した答えを、口にする

「私の主は、騎士王です」

「……そうか。俺は父上の側に付くぜ」

その言葉は意外なもので、思わず訊き返してしまった。

「貴方が……ですか？」

「当たり前だろ？ だって俺は……いや、アンタに語ることにじゃないな」

そう言つて彼は獰猛な笑みを浮かべる

「じゃあな。次に会つた時は……わかつてるんだらうな」

「ええ——それでは」

#

男は一人、込み上げる思いを胸に歩む。

「——っ」

抑えきれなくなつた思いは堰を切つて溢れ出す。

「何故、何故なのですか！ 何故同胞達と戦わなくてはならないっ!!!」

——それは慟哭。誰よりも皆と語り合い、それぞれの思いを理解したが故の深い

悲しみ。

「……………いえ、とうに覚悟は決まっていたのです。あとはただ進むのみ、それだけなのですから……」

そうして彼は歩む。己の信じる道を。もう後戻りは出来ないのだから。

——その涙は一体誰のために流した涙だったのか

それぞれが、それぞれの決意を胸にその地へ集う。

——待っていたのは、獅子の如き王。その貌は甲冑の中、窺い知ることは叶わない。

「——さて、決断の刻だ」

この唄を君へ

「——なあ、トリスタン。俺が許せないか？」

賑わう喧噪から少し離れた草原に、二人の騎士がいた。

「……………どうなのでしょう。私にはわからない。確かにあの時、私は燃え上がるような怒りを感じ、貴方へ殺意を込めた槍を向けた」

「そりやそうさ。俺達が戦ったのは地位のためでも名誉のためでもない。

——ただ一人の女の為インルデに、俺達は命を懸けたんだ」

「ええ、互いに刃を、矛先を向け合った相手とこうして共に同じ夜空を見上げるというのも中々に不思議なものです」

そう言うともう一人の男はそりやそうさと笑い、

「最初は揉め事ばかり起こしていたからな。昨日の敵は今日の友とは言うが、そう簡単に行くものでもない。

……………そうだ、トリスタン。何時もの頼む」

「ええ、承知しています。……………全く、貴方のせいで私はいつもこうして豎琴を持ち歩くようになってしまった」

溜め息をつく男。もう一人の男は言う

「俺だけじゃないだろ？愛しの王妃様にもそいつを聴かせてる。豎琴の指導もしてるんだって？」

「……………貴方とイゾルデは何時の間に仲良くなったのですか……」

「いや……………流石にまだ仲良くはなれない。王妃様は俺の命の恩人だが、彼女からすれば愛しい人を傷つけた男だからな。ただ、俺がたまたま彼女と出会って君や他の円卓の騎士達との冒険話をしたらそのまま帰らせるのは忍びないと二人の馴れ初めやらを聞かされたに過ぎない。…凄く幸せそうな顔をしていたよ」

「……………そうですか……」

——とところで、貴方は今も？」

「勿論、君がもし彼女を手放すようなことがあればだが」

「……………」

「そんな顔をするな。俺を睨む前に王妃様の幸せを考えてやれ。お前は最近どこか暗い……………やはり、マルク王のことか？」

もう一人の男がそう訊くと、男は少し暗い顔をして、

「……ええ。……………その話は良いでしょう。今日は宴なのですから。私達も楽しまなくて
は」

「ああ、頼んだ。君の豎琴は酒を飲んだ後が一番心地が良い」

満天の星空に響き渡る旋律

それは、何処までも遠く

苦悩に満ちた、

しかし何処までも美しい愛を唄う

——此処にはいない其処にいる貴女へ

私の唄は届いていますか

#

「——さあ、決断の刻だ。」

嘗て私と共に在った円卓の騎士よ、卿らの決断がどのようなものであらうと、私はそれを受け止めよう。

我が最果てへの路に立ち塞がりこれを阻もうとする者、

我が路を共に歩みこれを斬り開かんとする者

どちらも苦悩の果てに到ったものである。

——なればこそ、此処で果たさねばならない使命がある。

その剣を、その弓を、その槍を握るが良い

卿らの運命は、此処に定まる」

こうして嘗ての同胞は互いに刃を向け合う

ある者はその刃先を獅子王に向け、

ある者はその前に立ち塞がりその刃先を向ける

こうして

ケイ、パーシヴァル、ガヘリス、パロミデス、ペリノア王、ボールス。6名の騎士達は獅子王を阻む路を、

ガヴェイン、ランスロット、トリスタン、ガレス、アグラヴェイン、モードレッド。6
名の騎士達は獅子王に従う路を選択した。

皮肉なことに6対6。

交わす言葉も無く、辺りを重い沈黙が包む。

互いに一步も動かずにただその刃先を向け合う

——そして、始まりは突然訪れる。

いや、彼等にとつてそれは突然ではなく必然。開戦に言葉など不要。誰かがどんなに
永遠を望もうともその刻は残酷にも自ずからやって来るのだから。

誰かが動く。その瞬間に時の歯車は動き出した。

こうして黄昏の中、長い戦いは幕を開けたのだ。

#

「…………やはり、貴方は獅子王を誅する路を選んだのですか。パロミデス」

トリスタンが悲しそうな表情を浮かべ対峙するのは、パロミデス。

「当然だ。君達の騎士道がどのようなものかは知らないが俺は民を見捨てる王に仕えることは出来ない」

「王は民を見捨てる訳ではありません。一人でも多くを救う路を選んだだけなのです」

「一人でも多く…………か。であれば何故聖抜などをやるのだ？本当に民を救うのならば人々を入れるだけ迎えるべきだ。だが王はそれをしない…………トリスタン、君もわかつているのだろうか？王が救おうとしているのは決して民などではないと」

「それでも!!私は王に仕えると決めたのだ……………!私は嘗て不遜にも王を見捨てた。その結果、私は王の力になることも出来ず、己の罪の報いを受けて死んだ。だからこそ私は……………」

溢れだす激情を曝け出すトリスタンに、パロミデスは少し驚いた顔をして、

「久しぶりだよ、トリスタンのそんな激情を見るのは。君は情が深すぎる故に、それを見せまいとしていたからな。イゾルデの時以来だろうか」

するとトリスタンは顔を俯け、呟く

「私は彼女を愛して良かったのでしょうか？」

#

——トリスタンという男の生涯は、余りに悲劇的である。

リオネスのメリオダス王はコーンウォールのマルク王の妹エリザベスを王妃に迎え、幸せな日々を送っていた。しかし王に長年思いを寄せていた婦人が、ある日魔法で王を古城に閉じ込めてしまった。

王妃は王を探して森へ向かいその時、森の中で彼女は王との間に出来た子を産むことになる。

それがトリスタン^{悲しみ}である。

王妃は我が子に名を授けるとそのまま息絶え、その後王も亡くなってしまう。従者グーヴァネルとフランスへ渡り、文武ともに優れる若者になっていったトリスタンは父のいないリオネスには帰らず、伯父のマーク王の元へ向かった。

マルク王はアイルランド王の弟マロースに貢ぎ物をするかか一騎討ちするかを迫られていた。そこでやって来たトリスタンを騎士に任命し、マロースと戦わせたのだ。

結果、マロースは頭蓋を斬られ逃走するも死亡。トリスタンも毒を受けてしまう。

一方、アイルランド王妃は頭蓋に在った劍の刃を小箱へ入れ、マロースの仇討ちを誓った。

毒を治すためにアイルランドへ行ったトリスタンはそこで一人の少女と出会う。

少女の名はイゾルデ。アイルランド王と王妃の娘であった。

彼女は彼の豎琴に惹かれ、彼を宮廷へ招待する。

彼等からしたら仇にあたるトリスタンは咄嗟にトラムトリストと偽名を名乗り、毒の手当てをしてもらう。

二人は次第に惹かれ合い、幸せな日々を送っていた。

——俺が君と初めて出会ったのもその頃だったか。

俺はイゾルデに恋をしていた。遊びなどでは無く、本気の恋だ。俺は彼女へよく贈り物をして、彼女の気を惹こうとしていた。

ある日、とある話が俺の耳に入ってくる。それは大馬上槍試合を行い、優勝者はある婦人と三日後に結婚できるというものだった。

俺は直ちに名乗りをあげた。その婦人こそイゾルデであると確信したのだ。仮にも自分は誉れある円卓の騎士。優勝は目に見えていると、そう思っていたのだ。

君に出会うまでは。

——— 気に食わない奴だと思った。

白い馬に乗った白い騎士。白馬の王子様気取りかと馬鹿にこそしたが、その佇まいはこれまで戦ってきた奴らとは比べものにならないほど洗練されていた。

これまでは余裕綽々としていた俺も、今回ばかりは気を引き締めた。決して油断はしなかった。慢心すればその時には俺の眼前に槍が突き付けられるのだと、そう思わせる何かがあったのだ。

皮肉なことに俺の恰好はまさに黒い騎士といったところ。

こうして俺達のイゾルデを巡る争いは幕を開けたのだ。

俺は槍にも自信はあったが、トリスタンの腕もまた驚嘆に値するものであった。

少しでも隙を見せれば互いに槍を振るった。互角にも思える長い戦い。そこに僅か

な差があつたとすれば俺は焦り憤り、君はただ一人のことを想いその炎を燃え上がらせながらもいたつて冷静に動いたその心の差だろうか。

気がつけば俺の眼前には槍が突き付けられ、今にも死が迫っていた。

『貴方は素晴らしい騎士でした。僅かに選択を誤れば倒れていたのは私の方だったかも知れません。私はそんな未来ある騎士の命を奪いたくはない。彼女——イゾルデのことは諦めてください。それを条件に私は貴方を助けましょう』

——冗談じゃない。俺は彼女をこれほどまでに愛しているのに、それを諦めろと。

俺は憤りを感じたが、何故だか頭だけは妙に冷静だった。

愛を貰いて死ぬ。ああ、それは確かにとても美しいことだろう。しかし、それではだの無駄死にだ。何せ彼女の方は俺に目を向けていないのだから。

そして俺はその言葉に頷いた。すると彼は安心したように踵を返す。

『……………白い騎士よ、最後にその名を教えてはくれないか』

『トラムトリスト……………いえ、トリスタン。これが私の名です』

俺がキャメロットに帰還して少し経った時だ。キャメロットにはある無名の騎士の噂が広がっていた。

曰く、その腕はランスロット卿に並ぶほど

曰く、その美貌たるや多くの女を虜にせしめる

曰く、その騎士はコーンウォールからの使者であり

曰く——ある娘を探しているという

そして偶然にもイゾルデの父はアーサー王に対する反逆の疑いがかけられ、その嫌疑を晴らすための一騎討ちに彼は現れたのだ。

あの後、トリスタンはイゾルデに仇だと知られてしまい、

アイルランド王は国内へ足を踏み入れない条件で彼の命を救った。

トリスタンはイゾルデに生涯の騎士となると誓い、王女も七年間一人でいることを誓い指輪をとりかわすとコーンウォールへ帰ったという。

そしてイゾルデをマルク王の妃として迎えるための使者としてアイルランドへ向かうも暴風でキャメロットに流れ着いたのだという。

幸運なことにアイルランド王と再会した彼は王を無罪に導き、アイルランドへ招待される。

そこでトリスタンはイゾルデをマルク王の妃として迎えたいと言った。イゾルデはとても悲しんだという。当然だろう、ようやく会えたと思えば自分をトリスタンでなく彼の主君の妃にと彼自身が言ったのだから。

コーンウォールへ向かう道中、二人はある薬酒を飲んでしまう。それは本来マルク王

とイゾルデが飲む筈の妙酒。飲んだものを愛のしもべとし、二人は永遠に愛し合うというものだった。

長い旅路の末にコーンウォールに着いたが、二人は愛し合っているにも関わらずイゾルデは予定通りマルク王と結婚する。

そんなことなど全く知らない俺は、イゾルデがマルク王と結婚したと聞きトリスタンは彼女を諦めたのだと思ひ込んだ。あの後も決して冷めなかつたイゾルデへの恋の炎がさらに燃え上がり、イゾルデを手に入れようとコーンウォールへ向かつたのだ。

そこでイゾルデの従者ブラグウエインが襲われていたところを偶々救つた俺は、これはチャンスとばかりにブラグウエインを尼僧院で養生させ、彼女を探すイゾルデに対してこう言った

『王妃よ、私は貴女の従者の行方を知っています。もし、王が一つ私の望みを叶えて下さるのであれば私が彼女を連れて参りますが』

イゾルデはこの言葉に頷き、俺はブラグウエインを彼女の元まで連れて行つた。その後、王に向かつて俺はその望みを告げた

『王の妃であるイゾルデ様を貰い受けたく存じます』

こうして俺は彼女を連れ出したのだ。自分でも卑怯な手だとは理解していた。しかし、彼女を振り向かせるには無理にでも王妃という立場から降ろし、彼女の視界に俺を

入れなくてはならない。

トリスタンは幸運なことに狩りに行っていた。しかし、追いかけてきたマルク王の部下を倒している隙にイゾルデは何処かへ逃げてしまった。

ひたすらに彼女を求めて辿り着いたのは森の中の城だった。彼女はアドサープというこの城の城主に匿われていたのだ。

俺は彼女を奪ったが、あくまでもそれは王妃という立場から降ろすため。悪逆非道にもこの城を襲つてまで彼女を今すぐに手にいれようとは思っていなかった。俺はマルク王の部下がこの城を訪れ、彼女を連れ戻すこと無いように城門のところで眠りについた。

何やら妙な夢を見ていたようだが、その時のことはよく覚えていない。俺の眠りは一向に覚めることなく、ようやく目が覚めた時に見えたのは怒りの形相で槍を持つトリスタンだった。後に聞いた話ではなんでも槍で2回も突いてようやく起きたのだという。トリスタンは主君から妃を奪ったこと、そして何よりイゾルデに手を出したことに憤慨していた。だが俺も容易にこの扉を潜らせる訳にもいかない。

『そこを退け、パロミデス。貴方は一度は私が救ったその命を無駄にしたいようですね』
『俺は退かないさ、トリスタン。マルク王の傍にいてはイゾルデは幸せになれない』

こうして二人は激しく争った。その跡は悲惨なもので、彼等が争った場所には草一本

すら生えていなかった。まさしく全てを出しきった戦いだつた。長い戦いの中で互いに満身創痍、相手の血と自分の血で真っ赤になった躰を懸命に動かそうとするが腕にも脚にも力が入らない。

そんな中、何時の間にか城門へやって来たイゾルデがその双眸に涙を溢れさせながら口を開く

『どうか試合をやめて。片や私の愛する人。私は貴方にこれ以上傷ついてほしくありません。片や私を愛してくれた人。彼が洗礼を受けずに死ぬのは余りに可哀相です。

パロミデス様、グイネビア王妃へご挨拶の言葉をお伝えしてほしい。

この国には真に愛しあっている者が4人いるのです。

その名はランスロットとグイネビア、そしてトリスタンとイゾルデであると』

——俺はこの時確信してしまった。俺はイゾルデの愛をトリスタンから奪うことは出来ないのだと。

それほどに二人の愛は深く、美しかったのだ。

俺とトリスタンはその後、何だかんだで親友となつた。それはイゾルデの為に互いに全てを出しきつた故の絆であろう。

ある槍試合で、「アーサー王の敵方について、優れた円卓の騎士を打ち負かす方が名誉

「が得られるだろう」という俺の提案に乗り、変装したうえで俺、ガレス卿、ディナダン卿、トリスタンの4人で円卓の騎士達を討ち倒したこともあったか。ああ、あれは実に楽しかった。

しかし、トリスタンには刻一刻と幸せを脅かす存在が迫っていた。マルク王である。彼はトリスタンとイゾルデが愛し合っていることを良く思わず、トリスタンを妬んだ彼はトリスタンを排除しようとしたのだ。

その結果二人は逃走を図り、トリスタンが狩りにいつているところをマルク王の部下に見つかり毒矢を受け、さらにイゾルデはマルク王に奪い返されてしまう。

その後、白い手のイゾルデと結婚したトリスタンはブリタニーの争いで毒槍に突かれてしまったという。

美しきイゾルデへの想いを断ち切れないトリスタンは、彼女なら嘗てのように自分を毒から救えるだろうと部下に指輪を託し王妃を連れて来られたならば白い帆を。無理であったなら黒い帆を揚げて欲しいと告げる。

『イゾルデよ、帆の色は何色ですか……?白でしょうか、それとも黒でしょうか……』
白い手のイゾルデは白い帆を見たが、

『——黒です。黒い帆が揚がっています』

『そうか……ああイゾルデよ、わたしの愛する人よ——』

こうして、トリスタンという男の生涯は終わりを告げた。

その後イゾルデは岸に上がるトリスタンの死を知り、その死体を抱いて息絶えたという。

二人の生涯は余りに切なく、しかしどこまでも深い愛がそこにはあったのだ。

——それを今、君は何と言った？

#

「…思うのです、私では駄目だったのではと。偽りの名を騙ることで私は彼女と共に居られた。故に彼女へ恋心を抱けた。そして本来私が飲むべきではなかった酒を飲んだせいで私とイゾルデは深く愛し合った。そしてその愛に囚われた結果、白い手のイゾル

デを愛することが出来ずあのような最期を迎え、二人のイゾルデを不幸にしてしまった。…………後悔しているのです。やはり私の生き方は間違っていたのではないかと」

「…………ふざけるなよ。君が、それを言うのか!!?」

「パロミデス……………」

「だったら俺が言つてやる。君達の愛は間違つてなどない!!始まりなんて俺は知らないがその愛だけは確かに、本物だった!!……………なあ、トリスタン。それだけは言わないでくれ。君達の愛を誰よりも信じたイゾルデを否定しないでくれ!」

「……………ああ、私は悲しい。そんな言葉を告げてくれる大切な友がいることが何より嬉しく、そして何より辛い」

そうやってトリスタンはその弓を。パロミデスへ向ける。

「…良いさ。言葉が駄目なら力づくだ。獅子王への思い共々俺が全部打ち砕く!」

そしてパロミデスはその槍の矛先をトリスタンへ向ける。

#

妖弦フェイルノートは弓と呼ぶには余りに奇怪な存在である。彼が射つのは物理的威力を持つ音の矢。音速で飛び交うその矢は音であるが故に不可視に等しい。だがパロミデスはその研ぎ澄まされた感覚で飛んでくる矢を全て打ち払う。弓を持つ以上、トリスタンはパロミデスに近づかれては負けてしまう。近距離でも反撃出来なくはないが、それをパロミデスは許さない。それだけ互いの力を理解しあっているのだ。

射つ、払う、射つ、払う

ひたすらにそれを繰り返す。トリスタンの矢は未だ僅かにパロミデスを傷つけるのみ、しかしパロミデスもまた僅かしか前進できていなかった。矢を打ち払い、前進しようとした瞬間に次弾が襲いかかってくることで少しづつしか進めないのだ。このままではいつかトリスタンの矢がパロミデスを貫いてしまう。

そこでパロミデスは——あえて、その矢を受けることにした。

「!？」

全身を音の矢が切り裂く。だがパロミデスはその速度を落とすことなく近づいてくる。一気に距離は縮まったが、まだその槍は届かない。

「いや、これだけ近づけば充分だ。こういう風に使った試しはないがな」
 パロミデスは槍の矛先をトリスタンに向けて構えを取る

（投擲!?!）

——やはり、ここで決めるしかないか……! —

——フェイルノート痛哭の幻奏!!——

——Anything for Isoldé賤陋なるや奇計の紅槍!!——

#

「……………ぐつ、これは…フェイルノートが…!」

トリスタンの全身は血でまみれていた。全身に傷がつき、フェイルノートを持っていた腕は完全に折れてしまっている。もうこの戦いでは使い物にはならないだろう。しかし、それだけであつた。霊核は傷ついてこそいるが未だ破壊されていない。

——それもその筈。パロミデスが狙ったのはトリスタン自身ではなくその宝具、そして武装だった。

「……俺の宝具の真価は殺すことではなく、敵を無力化することにある」

そういつて立ち上がったのはパロミデス。しかしトリスタンの宝具をまともに受けた彼は霊核をほとんど破壊され、全身はトリスタンよりもボロボロで。それでも立っているのはパロミデスだった。

「…全く、想像以上のダメージを喰らった。お陰でもうボロボロだ」

「パロミデス…」

「俺の宝具は武器に命中させることでそれを使い物にならなくする。それ以外はただの強い槍さ。つまり、君のフェイルノートは今やただの豎琴で、君を守る防具は存在しない」

「……では、私の敗北ですか…」

「…残念ながら、俺には俺の騎士道がある」

そう言つてパロミデスはトリスタンの足下に槍を転がす

「これは…」

「戦いの前に偶々見つけたんだ。武器の一つも持たない奴は殺さない。そんなことをしたら獅子王のやろうとして同じになってしまうからな」

「……良いのですか？ 貴方はもう立つことすらままならない状況でしょう？」

「アーチャーが槍持つて戦うんだ。この程度はハンデにもならないさ」

そう言つて力強く笑うパロミデス。トリスタンは立ちあがりその槍を握る。

「…思えば初めて貴方と戦つたのも槍でしたね。良いでしょう、私も負けるつもりはありません」

「行くぞ、トリスタン！」

同時に駆け出す。ボロボロの身体を無理矢理に動かす。一步踏み出す度に筋繊維は千切れ、意識が飛びかける。そして勝負はたった一撃で決着を迎える。

二人は互いに向けて槍を振りかぶり――

パロミデスの槍はトリスタンの腕を

トリスタンの槍はパロミデスの霊核を貫いた

「……なあ、トリスタン。俺が許せないか？」

「いいえ。私が許せないのは私自身です。今なら分かる。あの時だって、私が憤つたのはイズルデー人守れない私自身でした」

「なら、親友の俺は君を許そう。だからトリスタン、自分の路を信じろ。君の人生は確かに後悔だらけだったのかもしれない。けど、君がこの路を通らなければ俺は君とこうし

て出会えなかった。故に俺が保障しよう。

——君の人生は、それでも美しかった。

そして俺はその路で君と出会い、友となれたことを嬉しく思う」

パロミデスの身体が光りを帯びながら崩れていく

彼は最後にいつもの笑みを見せてこう言った。

「じゃあな、今度はいつものやつを聴かせてくれ——」

——ありがとう、我が友よ

——ですが、私は親友である貴方をこの手で倒してしまった。私の指は悲しみ故にもう…動かないのです

前悔出来たら苦勞はしてない

森を抜けた先にある、何処にでもある小さな農村。

都からは遠く、訪れる者などいない閉じた世界。

川のせせらぎと麦の穂をわずかに揺らしていく穏やかな風、広がる草原に色とりどりの花々。木々の隙間から顔を出すリスやシカに川の中を自由に泳ぐ魚達。

煉瓦造りの小さな家で家族と過ごす、暖かで幸せな、なんでもない大切な日々。

それが私の全てだった。

空を自由に舞う鳥を見て、幼い私はふと思った。

—— ぼくも、あんなふうにいきたいな。

しかし、このときの私はこの小さな世界しか知らなかった。

名前も知らない勇敢な誰かが恐ろしい魔物を倒した。

森に住む心優しい動物達しか知らない少年からすれば、そんな話はお伽噺と同じこと。

まるで絵空事のように、そんな世界が森を抜けた先にある等とは思ってもいかなかった。

少年は自由を求めると同時に、この小さな世界を自分の全てであると信じて疑わなかった。

胸の内に夢物語を描きながらも、それは叶わないのだと何処かで諦観にも似たものを抱いていたのだ。

もし、ものがたりみたいなせかいがどこかにあるのなら、それはなんて――

#

剣戟の音がなり響く中、二人の男が対峙していた。

「ランスロット卿……」

「やはり、貴卿はそちらの道を選びましたか」

ランスロットは落ち着いた様子で対峙している騎士――パーシヴァルを見据える。

「……本当は、迷いなどありませんでした。王は変わられた。私は一人の円卓の騎士として、王の行いを認める訳にはいきません」

「……ええ、貴卿は間違つてなどいない。しかし、私は王の行いを否定することは出来な

い。王の選択はいつも正しかった。これが最善であつた。それを……認めざるを得なかつた」

怒り、悔しき、悲しみ。それらが混ざりあつた言葉に表せない感情をみせるランスロット。

パーシヴァルは彼を見て言う、

「……それならば、何故そのような顔をされているのですか。今の貴方は、まるで——」

まるで、罪を裁かれる罪人のようだ。

「……私は嘗て王を裏切つた。己の愛に目がくらみ、騎士としての誇りを損ない、結果として王を破滅へ導いてしまった」

——許されることでは、ないだろう。そう、許されない筈だつたのだ。

アーサー王の秘密を知りながらもグイネビアは彼の王の妻であることを受け入れた。アーサー王もまた、男として彼女を愛そうとした。

——いつからでしょうか、その愛は私にとって重荷となり私を縛る鎖となつてい

ました。

そう、グイネ^女ビアは言った。

王として国や民を愛そうとしたアーサーと、人としてのささやかな愛を求めたグイネビアの思いはすれ違い、しかしそれに気がついた時には離れられない程にその鎖は絡み合ってしまったのだと。

男は苦惱していた。

まだ間に合う。この手に握るべきは我が王への忠誠を誓う剣。その思いは変わらな
い。彼女の手を握るといふことはそれらを裏切るといふことに等しい。

王に仕える騎士として、円卓の騎士の一員としてそれは許されることではないだろ
う。

しかし、男は己の心に嘘を付くことも出来なかった。グイネビアへのこの思いが恋慕
であることを否定することは出来なかったのだ。

そして、一人の女としてのささやかな愛を求めたグイネ^女ビアの思いに、ランス^男ロット
は応えたのだ。

だが、この時男は気がつかなかった。

己の選択が王を破滅の路へ導いていたことに。

『ランスロット卿……貴様……!!王妃を……!!』

『——ッ！お逃げ下さい王妃!!ここは私が』

『ランスロット!!』

『早く!!』

『……これほどまで円卓の騎士を揃えて、何の用ですかアグラヴェイン』

『下らぬことを……貴様を不義密通の罪により罰する。卿らは王妃を追ってくれ』

『はっ!』

『……彼女をどうする気だ』

王妃を追おうと駆け出した騎士。

一歩、二歩。そして三步目を踏み出そうとした足は……地に着くことなく、消えて無くなった。

『ガッ……アアアアアアアア?!?!?!』

余りの痛みに敵前でありながらも叫び、悶え苦しむ騎士。ランスロットは彼の頭蓋に容赦なく剣突き立て言う

『……初めからわかつてはいたのです。この身は許されることなどないと。故に裁かれるのであれば、私はそれを拒む資格は無いと。……しかし彼女を、彼女の想いを踏み躪

ることは許してはならない。

……怒りだ。私は今、嘗て無いほどの怒りを感じている。

——彼女の為ならば、私は世界すら敵に回してみせよう』

#

『これで……終わりです、アグラヴェイン卿』

そう告げるランスロット。彼の剣、アロンダイトはアグラヴェインの心臓を貫き、そこから溢れた血が刃から柄へ、そうしてランスロットの手にこぼれ落ちた。

彼の全身は血でまみれていた。しかし、そのほとんどが返り血だった。円卓の騎士達が相手だ。当然、彼が負った傷は一つや二つでは済まなかったがそれでもこの人数差をひっくり返す程の立ち回りをさせたのは円卓最強の騎士と呼ばれる所以か。

『ラン……スロット。私は……卿、を、決して……許さない』

『……それで良いのです。貴方は王に仕える騎士として誰よりも正しかった。

さらばだ、アグラヴェイン卿』

それから、地獄のように日々は過ぎていった。

不義の罪で処刑されそうになった彼女を救う為だけに多くの円卓の騎士達を、嘗ての同胞をこの手に掛けた。許されざる罪であると知りながらもそれを背負い、戦い続けた。

私が剣を向けると皆は口々に言った。『どうしてこのようなことを』『何故、貴方ともあろう騎士が』

私は彼らに無言で剣を降り下ろした。

ガレスとガヘリス……特にあの兄妹には残酷な仕打ちをしてしまった。彼らは王妃の処刑を快く思わず、敢えて丸腰で警護にあたっていたのだという。

しかしその時の私はグイネビアを救うことに必死で、ただひたすら立ちはだかる者を切り伏せていた。私は愛に盲目であつたが故に、私を慕い刃を交える意志すら持たない彼らを殺してしまつたのだ。

ついに王はランスロットとグイネビアを討伐せよとの御触れを出した。王を裏切つたランスロットからすれば当然のこと。しかし、誤算があつたとするならば人望の厚かつた彼を多くの者が慕い、円卓の騎士の約半数程がこの命に従わなかつたことか。

王を裏切つただけではなく結果として己が円卓の騎士を決定的に分裂させてしまつたランスロットはさらに強い罪悪感に苛まれた。

——許してほしいなどとは思わない。私が犯した罪は余りにも大きすぎた。

許される筈がない。故に、私が望むのは断罪だ。

……だというのに、何故貴方は

『……すまなかった、ランスロット卿』

そんな顔を、そんな言葉を私に向けるといっているのでしょいか

死ぬ、と言ってくださればどれほど安心したことか。

地獄に落ちろ、と言ってくださればどれほど喜んだことか。

許さない、と言ってくださればどれほど救われたことか。

なんて、残酷。

王は男に、彼が一番望まない言葉を告げたのだ。

#

「はあああ!!」

「——ッ!」

パーシヴァルは強大なパワーでランスロットをはね除ける。

「ふつつ!!」

「ぐつ……!」

ランスロットは熟練の技術でもって巧みにそれをいなし、出来た一瞬の隙を突く。が、パーシヴァルもそれに反応し無理矢理体勢を変え、ランスロットの一撃を紙一重で避けた。

「……流石はパーシヴァル卿。予想以上の動きだ」

全力をもってしても簡単には崩れぬ拮抗。ランスロットの口をついたのは純粹な賛辞だった。

肩で息をし、何とか呼吸を整えているパーシヴァルを見据える。

——パーシヴァル卿は……素の戦闘力や技術だけ見れば私には劣っている。しかし、彼の咄嗟の判断力と勘は並ではない。仮に攻め立てたとしても粘られるだろう。

とはいえ彼が倒れるのも時間の問題。

しかし、その程度の実力差は彼も理解しているはず。それでも全力で挑んで来たの

だ。

ならば私が為すべきことは一つ。

「貴卿に敬意を、パーシヴァル卿。であれば我が全力を以て卿を倒してみせよう」

一步を踏み出した次の瞬間、ランスロットの姿が消えた

「——っ!!」

#

「ぐ……い……」

完全に眼が追い付かない。

気づいたときには既にそれは真横にいた。目の端で何とか捉えたアロンダイト。頭の内からけたたましく鳴り響く警報。意識を手放さん勢いでそれに身を任せた。

飛び散る鮮血。身体全体で避けるような余裕などありはしなかった。首を目一杯後ろに下げるのが精一杯。その勢いに任せ上体を倒し後方へと回避する。

しかし、

「アロンドナイト・オーパード
縛鎖全断・過重湖光」

本来であれば光の斬撃となる魔力をあえて放出せず、対象を斬りつけた際に解放する剣技に寄った宝具。

膨大な魔力は切断面から溢れ、その青い光はまさに湖のようであった。

普通ならば過剰負荷に耐え切れず斬り付ける前に剣が砕け散ってしまう、斬り付けるまで持ったとしても剣を使い捨てなければならなかったため本来なら不可能のだが、「決して壊れることがない」アロンドナイトを得物としているからこそ成し得る絶技である。

いつの間にか目の前にいたランスロットが剣を振りかぶる。パーシヴァルにはもう真つ向から受け止めるしか手段は無かった。

「ぐがっ、あっ……………！」

——致命的だった。彼の宝具は間違はなく霊核を砕いていた。

「これで……………終わりです」

「……………貴方は……………後悔、しているのですか？」

なんとか肩で息をしながらパーシヴァルは言う。

その身体は霊核を砕かれ、これまでの剣戟で痛々しいほどに傷でまみれていた。

「……………」

一方、沈黙するランスロットもまた目立った傷こそ無いが所々に剣による傷が見られ、大きく体力を削がれていた。

「私には、貴卿のことはわかりません。貴方の選択が正しかったのかも。……ですが、一つわかることはありません」

そう言つて、パーシヴァルは笑う。

「貴方に、そんな顔は似合いませんよ」

——そう。変わらない日常、諦観を覚えた少年の人生を変えてくれたのは、間違いなく貴方なのですから。

#

まるで、夢をみているようだった。

この辺りでは見たことのない屈強な馬。

それに乗っているのは黒い人のような形をしたもの。

『あなたは、天使様なのですか？』

そんな言葉が口を突いて出た。

だってそうだろう。こんな人は見たことがない。いるとするならば僕たちにいつも恵みを与えてくださる天使様だろう。

するとその天使様は立ち止まり、馬から降りると頭の鎧を取って微笑んだ

『いや、我々は騎士だ』

いつか母が語っていたことを思い出す。

『この森の外には、騎士っていう王様に仕える強い人達がいて、すつごく恐ろしい魔物から私達を守ってくれているのですよ。貴方のお父様も、騎士なのですよ』

絵本のような夢物語の登場人物が、そこにはいたのだ

『お父様?』

『いや、私は君のお父上ではないよ……もしかして、君がペリノア王の……』

そう言つて少年の顔をまじまじと見詰める男。

『……ああ、良い瞳をしている』

少年の頭を撫でると、男は微笑んだ。

どうやら騎士様達は戦いの後、帰路の途中で偶然この地へ足を踏み入れたらしく随分と疲労の色が見えたため我が家で一晚を過ごすことになったという。

明かりもなく、大空に溢れんばかりに星が輝く夜。

誰もが寝静まった静かな草原で、少年は星を眺めていた。

『どうしたんだい？こんな夜遅くに』

声のする方を振り向けば、先程の騎士様が立っていた。

『星を、みてるんです』

そう答えると、騎士様はおもむろに僕の横に座って星を眺めていた。

『騎士様は、星みたいですよ』

『……そうかな』

『きらきら輝いていて、手が届きそうで届かない』

『そんなことはないさ。騎士だって色恋に悩むし、酒を飲んで下らないことばかりしている』

『そういうことじゃないですよ』

むっ、と少し拗ねるように言う少年に騎士様は微笑む。

『でも本当さ。私には好きな人がいてね。でも彼女は私なんかを手を出してはならないような人なんだ。でも私は彼女のことを諦められなくて思い悩んでる。ほら、大したことはないだろう？』

『だからそういう問題じゃ……』

『でも、想いは伝えた方がいいんじゃないですか？きつと伝えない方が後悔するから』

『——』

『ああ、僕もあなたたちと同じだといいいのに、同じように輝いて立派だといいいのに』

僕がそう呟くと、騎士様は暫くの沈黙の後、おもむろに一本の剣を取り出して言う
『……もし本当に君が望むのなら、この剣を取りなさい。これは簡単に動物や、人すらも殺せてしまうものだ。この剣を握る覚悟が、この閉じた平和な世界から飛び出して血でまみれた自由な世界で生きていく覚悟があるのなら。』

——君は、立派な騎士になれるだろう』

その声の真剣さに、思わず身震いする。

人を殺す。その言葉の重みが恐ろしかった。

この剣を、握るべきではないのだろう。そうしてこの世界で平和に暮らして行くべきなのだろう。

でも、それが例え間違いだったとしても——

——僕はこの選択を、後悔しないだろう。

#

「嘗て私は、貴方に憧れて騎士となった。……しかし、騎士となつてから何度も苦しい思いをしました。あのまま平和に暮らしていれば、と考えたことすらありました」

「……………」

「それでも、私はあの日の選択を後悔しない。それは、私が信じた路だから。

———
「そして今も、私は私の信じる路を歩みます」

「ロンギヌス
聖者の祝福」

パーシヴァルがそう呟いた途端、槍から眩い光が溢れ出した。

ランスロットが瞼を開くと、そこには満身創痍であった筈のパーシヴァルが立っていた。彼の身体に刻まれていたランスロットの宝具によって負った筈の傷は塞がっていた。

神の子を刺した事により、魔槍と聖槍の属性を併せ持った槍。

聖人であるパーシヴァルが振るう限り、これは聖なる槍となる。

この槍の本質は罪や穢れを清算するところにあり、使い方によっては不治の傷を治すことが可能となる。

「……貴卿はあの日、私を星のようだと言った。しかし私には、卿の方が輝いて見える

」
「よ

そう自嘲気味に呟いて再びアロンダイトを構え、パーシヴァルへ向かっていった。

#

———
ある意味、当然といえば当然だった。

ロンギヌスがあるとはいえ相手は円卓最強と謳われる騎士。一騎討ちで勝ち抜くには技術も経験も足りなかった。唯一勝ちの目があるとすれば咄嗟の判断力や勘であったが、戦いが長引くほどそういった第六感的なものには上手く機能しなくなる。

隙を見て的確に急所に迫る剣。それに対応しきれずに振るつた槍は僅かに剣の軌道を逸らすも、剣は彼の左肩を抉るように傷つけた。

さつきは避けられた筈の攻撃が避けられない。

それは無意識の内に焦りとなり矛先を鈍らせる。

——遂にアロンダイトはパーシヴァルの霊核を貫いた。

「……ああ、終わりですか」

そんな事実を、私は不思議と受けとめられていた。

「パーシヴァル卿。貴方は本当に高潔な騎士でした。……眩しいくらいに」

「貴卿の息子……ギャラハッドほどではありませんよ」

懐かしむようにパーシヴァルは言う。ランスロットも少し頬を緩ませ、

「……ああ、本当に誇らしい息子だよ」

こうして言葉を交わせるのも最後。伝えなければ。今も己の決断に悩み苦しんでいる、円卓最強の騎士と呼ぶには余りに人間味に溢れる彼にこそ。

「……これから貴卿が行う事は、許されることではない」

「……わかつている」

「ですから一つだけ……もし、貴卿が悩んだのなら己の信じる路を選んで下さい」

パーシヴァルの言葉にランスロットは驚いたような顔をみせ、俯きがちに言う。

「……私はそうやって彼女を選び、王を破滅に導いたというのに、ですか？」

「ええ。だって、ランスロット卿は王や円卓の騎士達への罪悪感こそあれど、

——彼女を愛したことに、後悔なんてしていないのでしょうか？」

「」

「……私に未来を与えてくれた騎士よ、貴卿とまたお会い出来て、こうして剣と槍を交わ
せて、嬉しかった」

そう言って穏やかに微笑むと、パーシヴァルは光の粒となり消えていった。

#

ある時、女は言った

『何故、私の手を取ってくださったのですか？』

男は笑ってこう言った

——愛しているからさ